

南高等学校及び南高等学校附属中学校における  
中高一貫教育に関する検証  
報告書

令和6年3月  
横浜市教育委員会



# 目次

第1	中高一貫教育に関する検証にあたって	1
1	検証の目的	1
2	南高等学校・南高等学校附属中学校の概要	3
3	検証にあたっての論点・検証方法	7
第2	論点1：教育目標及びスクール・ミッションの達成状況	9
1	教育目標とスクール・ミッションの関連及び論点との対応	9
2	学校の取組の概要	10
	論点1-1：教育目標及びスクール・ミッションの実践状況について	19
1	取組の成果・実績	19
2	生徒や教職員等の意識	37
3	考察	42
	論点1-2：グローバルな視点の定着、グローバル教育実践状況について	44
1	取組の成果・実績	44
2	生徒や教職員等の意識	46
3	考察	49
第3	論点2：併設型中高一貫教育校としての取組	50
1	学校の取組の概要	50
	論点2-1：入学時期の違いによる教育的効果について	57
1	取組の成果・実績	57
2	生徒や教職員等の意識	60
3	考察	68
	論点2-2：併設型中高一貫教育校としての運営状況について	69
1	取組の成果・実績	69
2	生徒や教職員等の意識	71
3	考察	77
第4	検証のまとめ	78
1	論点1：教育目標及びスクール・ミッションの達成状況について	78
2	論点2：併設型中高一貫教育校としての取組について	79
	参考資料	81
	検証会議	86
	教育委員会事務局担当者	88



# 第 1 中高一貫教育に関する検証にあたって

## 1 検証の目的

### (1) 背景（学校のあゆみ）

平成 21 年 11 月、横浜市教育委員会（以下「教育委員会」という。）は、魅力ある市立高等学校の実現を目指して、様々な高校改革を進める中で、経済的に負担の少ない、公立の中高一貫教育を受けたいという市民ニーズに応えるため、平成 24 年度に南高等学校に附属中学校を設置し、併設型の中高一貫教育校として開校することを決定した。

平成 22 年 5 月、教育委員会は、「横浜市立中高一貫教育校基本計画（以下「基本計画」という。）」を策定し、設置の目的を改めて整理するとともに、「(1) 学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成」、「(2) 自ら考え、自ら行動する力の育成」、「(3) 未来を切り拓く力の育成」という 3 つの教育目標をはじめ、目指す学校像、教育課程編成の基本方針等、開校に向けて学校の基本となる方向性を示した。

平成 24 年 4 月、附属中学校を開校し、南高等学校・附属中学校は本市初の中高一貫教育校として新たなスタートを切った。学校は、基本計画で示された方針の下、附属中学校の「総合的な学習の時間（E G G）」、高等学校の「総合的な探究の時間（T R Y & A C T）」を軸として、様々な教育活動を展開し、生徒の育成に取り組んできた。

また、平成 27 年 4 月には、南高等学校は、グローバル教育の更なる推進を目指して教育内容を整理し、文部科学省からスーパーグローバルハイスクールの指定を受けた。その後は、海外研修をはじめとしてより充実した教育活動を展開し、グローバルリーダーの育成に取り組んでいる。

令和 4 年 3 月、教育委員会は、市立高等学校のスクール・ミッションを策定した。南高等学校についても、基本計画により定められた教育目標を踏まえて、学校に期待されている社会的役割、目指すべき学校像を再定義した。

### (2) 目的

平成 24 年度の附属中学校の開校以来、南高等学校・附属中学校は、総合的な学習・探究の時間を軸とした教育活動や、スーパーグローバルハイスクールとしてのグローバル教育の推進等、様々な特色ある取組を展開し、生徒の資質・能力の育成を図ってきた。

この間、附属中学校の 1 期生から 3 期生までは、基本計画に沿って、高校 2 年生までは中入生・高入生が別クラスで学んでいたが、4 期生以降は、中入生・高入生を高校 1 年生から同じクラスとし教育課程も変更するなど、学校は、併設型中高一貫教育校として社会的ニ-

ズや生徒の実態等に対応した改善・充実を図ってきた。

これまでこうした学校の取組については、学校評価や第三者評価において継続的に評価をしているが、主として各年度の状況の評価するにとどまっている。南高等学校・附属中学校は、本市として初めて設置した中高一貫教育校であり、今後の中高一貫教育をより良いものとするためには、設立時の目的が達成されているか、これまでの取組が効果的であったかなど、経年的に検証する必要がある。

令和4年度末、附属中学校の6期生（高校67期生）が卒業し、令和5年度には、併設型中高一貫教育校として12年目を迎えた。6期生は、全学年において附属中学校からの入学生が在籍している状態になり、学校全体として中高一貫教育を行う体制となった初めての学年であり、この学年の卒業をもって、中高一貫教育校への移行について一つの区切りを迎えたことになる。

そのため、教育委員会は、基本計画に定められた設置の目的・教育目標等の達成状況を振り返り、課題や今後の目指すべき方向性を整理し、南高等学校・附属中学校の中高一貫教育をさらに充実させることを目的として、開校からこれまでの取組について検証を行うこととした。

## 2 南高等学校・南高等学校附属中学校の概要

---

- (1) 学校名 横浜市立南高等学校・横浜市立南高等学校附属中学校
- (2) 課程 (高等学校) 全日制の課程 普通科
- (3) 所在地 横浜市港南区東永谷 2-1-1
- (4) 沿革概要

### ア 沿革

- 昭和 29 年 4 月 横浜市立港高等学校 (全日制普通科) 創立  
(中区吉田中学校内 現横浜吉田中学校内)
- 昭和 29 年 5 月 横浜市立南高等学校に改称
- 昭和 30 年 3 月 港高等学校 (定時制) (現 みなと総合高等学校) の校舎に移転
- 昭和 34 年 4 月 南区下永谷町 (現在地:現住居表示:港南区東永谷) に移転
- 平成 24 年 4 月 中高一貫教育校として、附属中学校開校
- 平成 27 年 4 月 文部科学省「スーパーグローバルハイスクール(SGH)指定」(5年間)

### イ 南高等学校附属中学校の設置について

#### ○ 平成 21 年 11 月 横浜市立中高一貫教育校の設置に関する基本方針 発表

横浜市では、魅力ある市立高等学校の実現を目指して、横浜商業高等学校の国際学科の設置や横浜サイエンスフロンティア高等学校の開校など、様々な高校改革を進めています。そのような中、平成 10 年の学校教育法の一部改正により、中高一貫教育校の設置が可能となり、全国各地で設置が進み、関東地方の都県においても開校が相次いでいます。

本市でも、経済的に負担の少ない、公立の中高一貫教育を受けたいという市民ニーズに応えるため、設置に向けた検討を重ねてきました。平成 24 年度、南高等学校に附属中学校を設置し、併設型の中高一貫教育校として開校します。

○ 平成 22 年 5 月 横浜市立中高一貫教育校基本計画 発表

**設置の目的**

横浜市では、より魅力ある市立高等学校を目指して、横浜商業高等学校の国際学科の設置や横浜サイエンスフロンティア高等学校の開校など、様々な高校改革を進めている。一方全国各地では、平成 10 年の学校教育法の一部改正で中高一貫教育校の設置が可能となり、既存の学校の改編や新設による開校が進んでいる。

こうした状況の中、本市においても、現行の市立中学校、市立高等学校に加え、市立中高一貫教育校という新たな選択肢を市民に提供するために設置することとした。そして、6 年間の安定した環境の中で、計画的・継続的な教育活動を展開し、横浜はもとより国際社会で活躍する志の高いリーダーとなる人材の育成を目指す。

**教育目標**

- (1) 学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成
- (2) 自ら考え、自ら行動する力の育成
- (3) 未来を切り拓く力の育成

**目指す学校像**

- (1) 6 年間の一貫教育で健全な心身をはぐくむ学校
- (2) 質の高い学習により、高い学力を習得できる学校
- (3) 生徒が互いに切磋琢磨し、常に活気に溢れている学校
- (4) 国際社会で活躍するリーダーの育成を目指す学校

○ 平成 23 年 4 月 1 日 開設準備局設置

○ 平成 24 年 4 月 1 日 開校式

第 1 回入学式を挙行 160 名入学

(5) 教育理念・目標等

ア 教育理念

知性・自主自立・創造

イ 教育目標

- 学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成
- 自ら考え、自ら行動する力の育成
- 未来を切り拓く力の育成



## ウ 教育方針

### ○ 高い学力を身につける

基礎基本に基づいた高い学力を身につけさせるとともに、科学的探究を通して学問や芸術への興味関心を育てる。

### ○ 豊かな人間性をはぐくむ

生徒が、健全な心と身体を培い、生きる力を身につけ、豊かな人間性をはぐくむ。

### ○ グローバル人材を育成する

自他の人権を尊重する精神と集団の中で協力的に問題解決をする力を身につけ、グローバル社会で活躍できる人材を育成する。

## エ スクール・ミッション<sup>※1</sup>

中高一貫教育校として、6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラムを軸に、国際社会及び日本における課題の発見・解決に資する知識・技能の習得、それらの活用に関わる思考力、判断力、表現力等の育成を図り、国際社会で活躍できるグローバル人材を育成します。

## オ 南高校が目指すグローバルリーダー

- 横浜から日本を牽引しようとする高い志を持つ生徒
- 国際社会の発展に寄与できるリーダーとなる生徒
- グローバル社会での将来像を描く生徒
- 主体的に学び、自ら探究する生徒

### 【スーパーグローバルハイスクール（SGH）】

- ・平成27年度～令和元年度 文部科学省の指定を受け、国の事業として実施  
現在はスーパーグローバルハイスクールネットワークに参加
- ・令和2年度～ 横浜スーパーグローバルハイスクールとしてSGH事業を継続

## (6) 卒業者総数（令和5年3月現在）

高等学校	23,505	名
附属中学校	1,435	名

※1 スクール・ミッション

各高等学校が育成を目指す資質・能力を明確にする前提として、設置者（教育委員会等）が各高等学校の存在意義や各高等学校に期待されている社会的役割、目指すべき高等学校像を再定義したもの。横浜市では、各校の状況を踏まえて、令和4年3月に制定した。

(7) クラス数・生徒数 (令和5年5月1日現在)

表 学年別クラス数・生徒数 (人)

学年	クラス数	男子	女子	計
中学校1年	4	73	87	160
中学校2年	4	81	80	161
中学校3年	4	80	78	158
中学校計	12	234	245	479
高校1年	5	85	109	194
高校2年	5	94	96	190
高校3年	5	93	100	193
高校計	15	272	305	577

(8) 職員数 (令和5年5月1日現在)

ア 附属中学校

(人)

校長	校長代理	副校長	教諭	養護教諭	事務長	事務吏員	技能吏員	計
(1)	1	1	24	1	0	1	0	28

イ 高等学校

(人)

校長	副校長	教諭	養護教諭	実習助手	事務長	事務吏員	技能吏員	計
1※	2	52	2	1	1	3	3	65

※附属中学校長と兼任

(9) 施設

ア 校地面積 54,361 m<sup>2</sup> (校庭 10,240 m<sup>2</sup>)

イ 校舎延床面積 19,785 m<sup>2</sup> (教室棟 14,227 m<sup>2</sup>、 体育館 5,558 m<sup>2</sup>)

### 3 検証にあたっての論点・検証方法

#### (1) 検証にあたっての論点

本検証は、附属中学校設立時に策定した基本計画に定められた設置の目的・教育目標等の達成状況を振り返り、課題や今後の目指すべき方向性を整理し、南高校・附属中学校の中高一貫教育をさらに充実させることを目的として実施した。教育目標及びスクール・ミッション達成のための実践や、併設型中高一貫教育校としての取組は、基本計画を踏まえたものであるため、検証にあたっては、次のとおり論点を設定した。

#### 論点 1：教育目標及びスクール・ミッションの達成状況

論点 1-1：教育目標及びスクール・ミッションの実践状況

論点 1-2：グローバルな視点の定着、グローバル教育実践状況

#### 論点 2：併設型中高一貫教育校としての取組

論点 2-1：入学時期の違いによる教育的効果

論点 2-2：併設型中高一貫教育校としての運営状況

#### (2) 検証方法

上記の論点に対する検証材料として、これまでの学校の取組、横浜市学力・学習状況調査、実用英語技能検定（英検）、大学合格実績等のデータ、学校評価・第三者評価、生徒や教職員、保護者等へのアンケート調査・ヒアリング調査の結果等を用いた。

これらの検証材料をもとに、取組の成果と課題を整理し、今後の中高一貫教育の充実に資するための方向性について整理した。

なお、論点 2 については、これまでの併設型中高一貫教育校としての取組等をまとめ、主に今回実施したアンケート調査・ヒアリング調査から検証を行った。

#### (3) アンケート調査の概要

##### ア 調査対象と対象者数

調査対象は、生徒、教職員、保護者、同窓会、後援会とした。

表 アンケート調査回答者数

学年	a. 有効回答者数 (人)	b. 無効回答者数 (人)	c. 回答数計 (人) (a+b)	d. 調査対象者数 (人)	有効回答率 (a/d)
生徒	843	8	851	1,056	79.8%
教職員	74	0	74	93	79.6%
保護者	562	0	562	1,056	53.2%

同窓会の回答者数は 17 名、後援会は 6 名であった。

#### イ 調査方法

WEBアンケート形式で実施した。なお、保護者、同窓会、後援会の希望者に対しては紙面によるアンケート形式でも実施した。

#### ウ 調査期間

令和5年7月12日～令和5年8月中旬

#### エ 調査委託機関

社会システム株式会社

### (4) ヒアリング調査の概要

#### ア 調査対象

高校の生徒、附属中学校・高校の教職員

#### イ 調査方法

学校の会議室にて、高校の生徒、附属中学校の教職員、高校の教職員の3回に分けてグループヒアリングを実施した。

#### ウ 調査日

令和5年7月26日

※教職員については、本調査日以降にも適宜追加でのヒアリングを実施した。

### (5) 検証会議・報告書

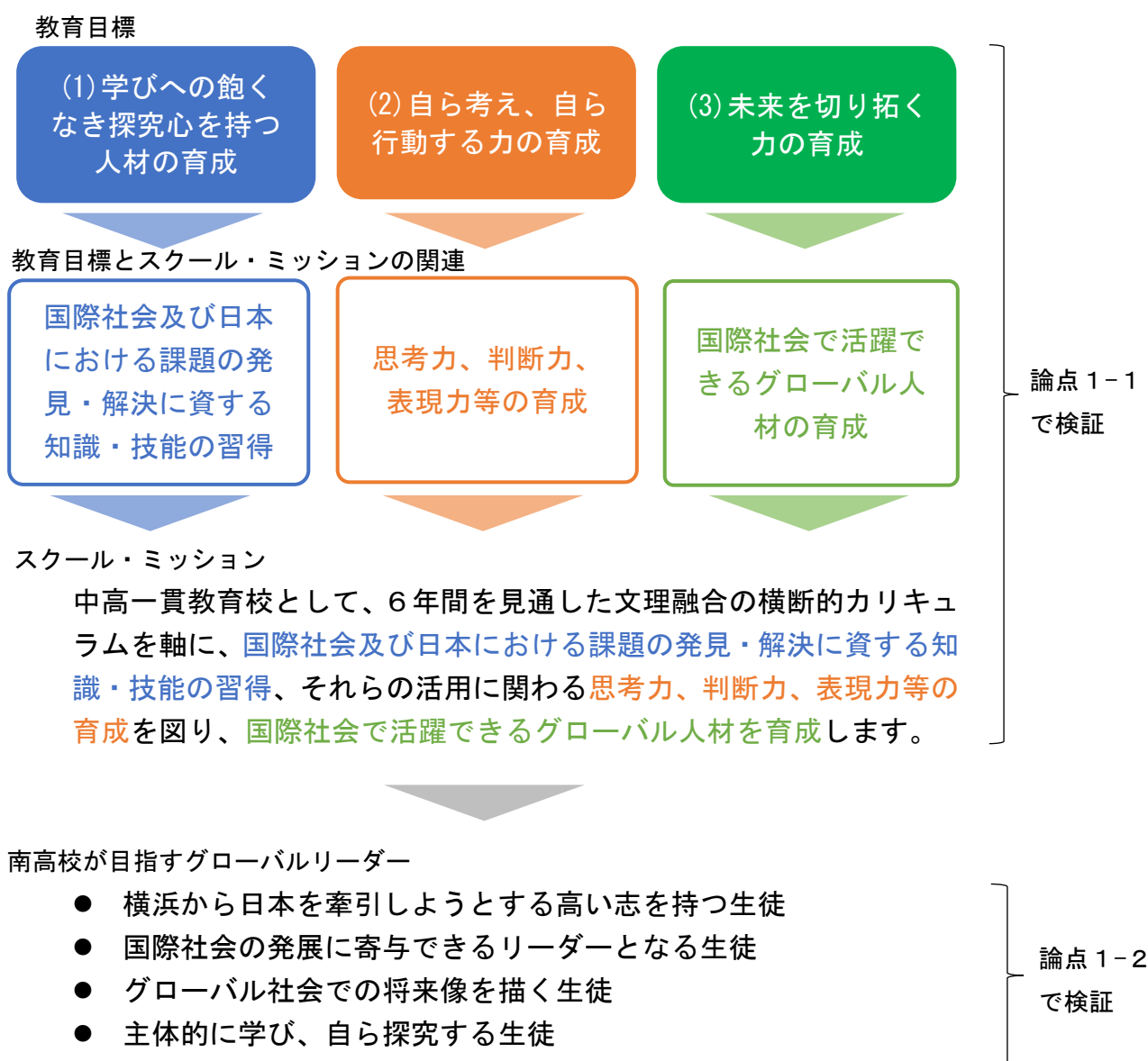
検証にあたって、教育委員会事務局は、運営要綱（P86）に基づき検証会議を開催し、委員にそれぞれ意見及び助言を求めた。

本報告書については、上記検証材料及び調査の結果から、教育委員会事務局が作成した。

## 第2 論点1：教育目標及びスクール・ミッションの達成状況

### 1 教育目標とスクール・ミッションの関連及び論点との対応

南高校・附属中学校では、次の3つの教育目標を踏まえてスクール・ミッションを策定しており、今回の検証にあたっては、それぞれの教育目標とスクール・ミッションを関連づけて整理した。論点1-1においては、これら2つの達成状況について検証を行った。



以降では、まず、学校のこれまでの取組について整理した上で、教育目標ごとに成果・実績を整理した。さらに、生徒、教職員、保護者、同窓会向けのアンケート結果を用いて現時点の目標への達成状況を検証した。

## 2 学校の取組の概要

### (1) 教育課程について

#### ア 南高校附属中学校

#### (ア) 教育課程の実施にあたっての基本的な考え方

教育課程の実施にあたっての基本的な考え方として、次の5点を整理している。

- 豊かな人間性や、社会性を養う（自らを律する、他人と協調、思いやる気持ち、感動する心）
- バランスの良い学びの実現（9教科をバランスよく学ぶ、高校では5教科7～8科目（予定）の大学入学共通テストを目指す）
- 国際社会で活躍できる語学力、表現力を養う
- 言語活動・コミュニケーション活動を重視した学習活動
- 参加型学習・体験型学習を重視した教育活動

#### (イ) 資質・能力の育成に向けた魅力ある取組

資質・能力の育成に向けた魅力ある取組として、次の4点を整理している。

- 主体的・対話的で深い学びによる、思考力・判断力・表現力等の育成
  - ・ 筋道を立てて考える力をつけるために、日々の授業において、調べて書く、意見を述べる、情報の活用などを多く取り入れた授業を展開する。
  - ・ 3年間の「EGG<sup>※2</sup>ゼミ」を通して、言語の能力を高める授業を計画的に行う。
- 「国語・数学・英語」の授業を毎日行い、特色ある授業を展開
  - ・ 中学校1年生から高校1年生までの4年間は「国語・数学・英語」の授業を毎日行う。（中学校3年間で385時間の授業時数増）

表 授業時数

	標準中学校3年間	南高校附属中3年間	授業時数増
国語	385 時間	525 時間	+140 時間
数学	385 時間	525 時間	+140 時間
英語	420 時間	525 時間	+105 時間

- ・ 基礎・基本の確実な定着とともに、体験的、課題解決的学習、発展的な学習を取り入れ、個々の才能や能力を引き出す。
- ・ 英語検定、数学検定などの各種検定試験を目指す。
- ・ 英語指導助手（AET）が常勤し、英会話の授業を指導する。

※2 EGG

附属中学校の総合的な学習の時間の通称。具体的な取組についてはP12～13に記載。

## ○ 理数教育の充実

- ・ 「数学・理科・英語」の授業を少人数またはティームティーチングで展開する。
- ・ 日々のきめ細やかな指導を通して基礎・基本の徹底と学習意欲を高め「確かな学力」を育てる。

## ○ 土曜日や長期休業日を活用し、様々なプログラムを実現

- ・ 大学の教員による発展的な英語講座を行う。
- ・ 全学年、夏季休業中に英語集中研修を開く。

## イ 南高校

### (ア) 教育課程の実施にあたっての基本的な考え方

教育課程の実施にあたっての基本的な考え方として、次の3点を整理している。

- 自主自立の精神と、豊かな人間性を育む
- これからの社会で求められる資質・能力を身に付け、一人ひとりの進路実現を図る
- 国際社会で活躍できるグローバル人材を育成する取組を推進する

### (イ) 特色ある教育活動

特色ある教育活動として、次の2点を整理している。

#### ○ 課題解決型学習 グローバル教育の充実

- ・ 総合的な探究の時間「TRY&ACT<sup>※3</sup>」での課題解決型学習
- ・ 実用英語技能検定等の実施
- ・ 海外大学への進学支援

(横浜市立高校海外大学進学支援プログラム (ATOP) 拠点校)

#### ○ 計画的な学習支援と進路ガイダンスの充実

- ・ 全学年、週33単位の学習により、幅広く学ぶことができる教育課程を編成
- ・ 数学・英語で少人数授業展開を実施
- ・ 長期休業中や土曜日に、進学に向けた計画的な補習や講習を実施
- ・ 外部模擬試験の計画的な実施と、模擬試験の解説会の実施
- ・ 客観的なデータにもとづく、的確な進路指導を実施

---

※3 TRY&ACT

高校の総合的な探究の時間の通称。具体的な取組についてはP12～13に記載。

## (2) 総合的な学習・探究の時間（EGG・TRY&ACT）について

附属中学校における総合的な学習の時間「EGG」では、豊かな人間性の基礎である「コミュニケーション力」（自己理解、他者理解、情報を正しく理解し考える力、考えを発信する力）を育成することをねらいとしたプログラムを展開し、子どもたちが、将来国際社会で活躍するために必要な人間性の基礎を築いていくことを目標としている。

EGGは大きくEGG体験、EGG講座、EGGゼミという3つに分かれている。EGG体験は英語集中研修などの活動、EGG講座は企業等による講演、EGGゼミは中学校1年生、2年生で基礎力養成・演習、3年生で卒業研究論文作成・発表を行うものである。

なお、EGGの活動における資料収集、資料整理、スライド作成、論文作成など、課題探究学習の各段階で1人1台端末（ノートパソコン）を利用して取り組んでいる。

また、2年生の英語集中研修を、東京グローバルゲイトウェイ（TGG）<sup>※4</sup>を利用して行っている。

中学校3年間のEGGでの学びを通して、自分の力で将来を切り拓く意欲を育て、高校での3年間につなげている。

高校の教科横断的な探究活動「TRY&ACT」では、グローバルリーダーとしての必要な素養と異文化理解を育んでいくことを目標に、課題解決型学習を実施している。

取組の一環として、グループ研究で異文化理解を深め課題探究力を育成する学習や、大学や企業と連携した外部講師による講演やワークショップを実施している。

EGG及びTRY&ACTのこれまでの取組については、次のとおりである。

---

※4 東京グローバルゲイトウェイ（TGG）

東京都教育委員会と株式会社 TOKYO GLOBAL GATEWAY が提供する体験型英語学習施設。



表 EGG及びTRY&ACTのこれまでの取組

学年	種別	年度 種別等	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	
			SGH 研究開発名「国際都市横浜発 次世代ビジネスリーダーの育成」					横浜SGH							
中学 1年 3年	体験	プロジェクトあしがらアドベンチャー21	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	
		構成的グループエンカウンター研修	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	
		コミュニケーション研修	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	
		夏季英語集中研修	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
		国際交流体験（海外の学校からの生徒の受入）		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	
		イングリッシュキャンプ		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	
		カナダ研修旅行		○	○	○	○	○	○	○	○				
		関西方面研修旅行												○	
	ゼミ	基礎力養成（調査、研究、まとめ方） （R5～探究的な学習の基礎力養成）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		多様な表現形式の学習、実践 （R4～）もの見方を広げながら探究的な学習を積み重ねる		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		卒業研究			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		講座	K-DEC開発教育講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			横浜市大国際理解講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			JAXA宇宙開発講座	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			弁護士による法教育講座		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
原爆先生の特別授業講座												○	○		
情報のタネのを見つけ方講座												○	○		
人の生き方に学ぶ講座												○	○		
高校 1年	国際社会とコミュニケーション （国際理解・国際社会の課題発見と解決）	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	自己探求 （探求レポート、キャリア教育、人権・食育等、適性・関心の探求）	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	セミナー（出張講座、大学見学、企業・公的機関見学、 ジュニアアチーブメント）	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
	公共機関や企業による研修等（デザイン思考やJAXA研修含む）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	シンガポールイマージョン研修					選抜	選抜	選抜	選抜	選抜					
	海外イマージョン研修合同報告会					○	○	○	○	○					
	国内イマージョン研修（グローバルビレッジ研修）					○	○	○	○	○		○	○		
	国内イマージョン研修（国際大学）					選抜	選抜	選抜	選抜	選抜					
	SGH研究発表会						○	○	○	○					
	SGH研究発表会へ向けての3学年合同情報交換会								○	○					
	SGH研究発表会 国内イマージョン研修報告								○	○					
	グローバルリサーチテーマ発表会					○									
	東南アジア研究・報告書作成、提出								○	○					
	SDGs・探究活動											○	○		
	YSGH海外研修												○		
高校 2年	国際社会とコミュニケーション（社会・国際社会の課題発見と解決）	○	○	○											
	自己探求（マイライフ論文、キャリア教育（進路学習）、食育等）	○	○	○											
	セミナー（ファームステイ（酪農体験）、大学授業体験、 企業・公的機関体験）	○	○	○											
	「デザイン思考」ワークショップ・フィールドワーク等						○	○	○	○					
	ビジネス研修						○								
	シンガポール海外研修・B&S/国内研修旅行						○	○	○	選抜			○		
	シンガポール・ベトナム海外イマージョン研修						選抜	選抜	選抜	選抜					
	国際大学国内イマージョン研修						選抜	選抜	選抜	選抜					
	海外イマージョン研修合同報告会						○	○	○	○					
	GLP（グローバルリーダープロジェクト）						○	○	○	○		○	○		
	SGH研究発表会						○	○	○	○					
	研究論文作成							○	○	○					
	グループで課題解決に向けた探究学習											○	○		
	1・2学年合同発表会											○	○		
	3 高 年 校	総合学習							選抜	選抜	選抜				
国際大学国内イマージョン研修								選抜	選抜	選抜					
GLP（グローバルリーダープロジェクト）								選抜	選抜	選抜			選抜		

※ ○：学年で実施 △：形式を変えて実施 選抜：選抜した生徒で実施

### (3) スーパーグローバルハイスクール（SGH）の取組

平成 27 年度から令和元年度にかけての 5 年間、文部科学省から国際的に活躍できる人材育成を重点的に行う高校としてスーパーグローバルハイスクールに指定された。その取組概要と成果は、次のとおりである。

#### ア 指定期間

平成 27 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日（5 年間）

#### イ 研究開発名

「国際都市横浜発 次世代ビジネスリーダーの育成」

#### ウ 研究開発概要

##### ○ 研究開発のねらい

国際都市横浜に立地するグローバル企業や国際機関の支援を得て、貧困や資源開発、環境保全など、東南アジアの課題解決を目的としたソーシャルビジネスを構想する課題研究等を通して、想像力をもつ志の高いグローバル人材を育成する。

##### ○ 中高一貫教育校における学習のフレームワークとSGH研究開発の位置づけ

平成 27 年度に指定を受け、グローバルな課題研究に取り組む総合的な学習の時間のカリキュラムを編成した。その内容は、問題発見解決能力、コミュニケーション能力、提案力を育成するために、グローバル企業や大学、国際機関の支援を得ながら、国際的な課題について調査研究し、解決の糸口を見つけ、将来の進路を模索するというものであった。また、海外姉妹校との交流、海外留学、海外研修などを効果的に組み合わせることにより、異文化理解、国際感覚、英語力などの向上を図った。

## エ 事業実績例（令和元年度 指定5年目 最終年度）

スーパーグローバルハイスクール（SGH）に関する年間の取組実績は下記のとおりである。

表 SGHの取組実績（令和元年度）

時期	内容	対象
4月	IBM企業講座1 ダイバーシティ&インクルージョン	1年生全員
5月	アメリカ国務省外交官講座	1年生全員
5月	デザイン思考ワークショップ	1、2年生全員
6月	国際大学異文化コミュニケーション研修	2年生全員
7月	JAXA筑波宇宙センター	1年希望者10名
7月	国内イマージョン研修（国際大学）	2、3年生選抜
8月	シンガポール海外イマージョン研修	1年生選抜8名
9月	JOCA SDGs講座	1年生全員
10月	IBM企業講座2 ダイバーシティ&インクルージョン	1年生全員
10月	NASA講座 “The impact of Apollo 11 the NASA's plans for future space exploration”	1年生50名、附属 中生70名
10月	シンガポール海外研修	2年生全員
11月	国内イマージョン研修（国際大学）	1年生選抜25名
11月	SGH研究発表会	1、2年生全員
12月	SDGs講演会	1年生全員
1月	SGH研究発表会（1、2年生代表者の発表）	1、2年生全員
2、3月	研究のまとめ（1年：報告書提出、2年：研究論文提出）	1、2年生全員

## オ SGH指定終了後の取組「横浜スーパーグローバルハイスクール」

SGHで取り組んでいた事業が継続できるように、横浜市教育委員会が横浜スーパーグローバルハイスクール（令和2年度～）として指定した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初予定していた活動が実施できないこともあったが、国内でできる活動を工夫して取り組んだ。

### ○ 主な活動実績

- <令和2年度> TRY&ACT講演会
- <令和3年度> TRY&ACT起業講座、グローバルビレッジ研修、  
テンプル大学1日体験
- <令和4年度> TRY&ACT講演会、グローバルビレッジ研修、  
テンプル大学1日体験、国内研修 in 広島
- <令和5年度> TRY&ACT講演会、グローバルビレッジ研修、  
テンプル大学1日体験、国内研修 in 広島、国内研修 in 大分

○ 生徒の優秀論文テーマ例（令和4年度）

- ・非常食を身近なものとして感じるために
- ・水産資源を守るための漁業の在り方
- ・コーピング～自分で自分を助けるために～
- ・グローバル社会における同調的仲間意識と排斥性
- ・AI医療と人間のこころ
- ・C2TD～Corporate Collaboration Technology Development～

カ S G H指定終了後の取組「スーパーグローバルハイスクールネットワーク参加」

令和3年度～令和5年度にかけてスーパーグローバルハイスクールネットワーク参加校として次のテーマで認定された。ネットワーク参加校としての活動は、全国高校生フォーラム<sup>※5</sup>への参加がある。

○ 申請テーマ

「横浜から発信するSDGsに関連した世界の国々の課題解決」を目指す持続可能なグローバル人材の育成を推進する。

---

※5 全国高校生フォーラム

WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム校及びスーパーグローバルハイスクールネットワーク参加校を対象とした文部科学省が主催するイベント。参加校のプレゼンテーション（原則英語）、生徒交流会、講演会等が催される。

#### (4) 海外交流の取組

海外交流の取組として、海外研修（修学旅行）、カナダ姉妹校交流、海外への留学・留学生の受入れが挙げられる。その取組は、次のとおりである。

##### ア 海外研修（修学旅行）

###### ○ 南高校附属中学校（平成 26 年度～）

- ・ 中学校 3 年生の秋に、カナダ研修旅行（4 泊 6 日）を実施。
- ・ この研修旅行は、附属中学校のカリキュラムの中心となっている「EGG」（総合的な学習の時間）の 3 本柱のひとつ、「EGG 体験」の最終目標に位置付けられている。「EGG 体験」では「豊かなコミュニケーション能力の育成」と「円滑な人間関係づくり」を目指して、1 年生から様々な研修や交流体験を行っている。
- ・ カナダ研修旅行では、姉妹校であるバンクーバーのポイントグレイ・セカンダリー・スクールを訪れて学校生活を経験したり、現地のスタッフとともに市内をグループで散策したり、ホームステイを経験したりするなど、多くの時間を生徒たちだけで過ごす。生徒たちは、初めての場所で、初めて出会うカナダの人々と英語を用いてコミュニケーションをとり、生活を共にする。
- ・ 中学校 3 年間の「EGG」での学びを通して、自分の力で将来を切り拓く意欲を育て、高校での「TRY & ACT」に繋げている。
- ・ 令和 2 年度以降、新型コロナウイルス感染症の影響により、海外研修は実施できていないが、再開に向けて検討を行っている。

###### ○ 南高校（平成 28 年度～令和元年度）

- ・ 高校 2 年生の秋に、シンガポール海外研修（3 泊 5 日）を実施。
- ・ 平成 27 年度に文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定校となり、グローバル人材育成の一つの目標として、全員が海外での経験を積むことを掲げ、平成 28 年度から令和元年度まで 4 回実施した。スーパーグローバルハイスクール（SGH）の研究開発のねらいは、「東南アジアの課題解決を目的としたソーシャルビジネスを構想する課題研究等を通して、志の高いグローバル人材を育成する」というものだった。
- ・ 研修旅行では、グループで、研究に関する実地調査や、観光ビジネスの現場の視察などを行った。
- ・ 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）が終了したことを受け、課題研究のテーマを SDGs とした。グローバル人材の育成にあたっては、自国の現状・課題への理解を深めることも必要であり、環境・文化・社会・経済等について実地体験ができる北海道において令和 3 年度以降の研修旅行を実施している。

#### イ カナダ姉妹校交流（平成 24 年度～）

- 南高校・附属中学校とポイントグレイ・セカンダリー・スクールが、平成 23 年 6 月に姉妹校提携に合意し、翌年の平成 24 年から受入れと訪問を開始した（令和元年度まで毎年受入れと訪問を実施）。
- 交流では、それぞれの学校での授業体験や、ホームステイ体験等の異文化理解体験、ホストファミリーとの交流等を行っている。
- これまで、南高校からは約 180 人の生徒が訪問し、ポイントグレイ・セカンダリー・スクールからは、約 100 人の生徒を受け入れた。
- 令和 2 年度以降、新型コロナウイルス感染症の影響により、訪問と受入れが実施できていないが、今後早期の再開を目指す。

## 論点 1 - 1 : 教育目標及びスクール・ミッションの実践状況について

### 1 取組の成果・実績

#### (1) 学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成

教育目標「学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成」の達成状況を「横浜市学力・学習状況調査」「実用英語技能検定（英検）」の結果から分析した。

#### ア 横浜市学力・学習状況調査

##### ○ 横浜市学力・学習状況調査について

横浜市学力・学習状況調査とは、児童生徒の学力<sup>※6</sup>や学習状況を把握することで、各学校における指導改善や、児童生徒の学習改善につなげることを目的として、市立小学校、中学校、義務教育学校を対象にして横浜市が独自に実施する調査である。調査対象は小学校2年生から6年生及び中学校1年生から3年生までとなっており、調査を行う教科等については次のとおりである。

- ・ 小学校2年生・3年生：国語、算数、生活・学習意識調査
- ・ 小学校4年生・5年生：国語、算数、理科、社会、生活・学習意識調査
- ・ 小学校6年生：国語、算数、理科、社会、外国語、生活・学習意識調査
- ・ 中学校1年生～3年生：国語、数学、理科、社会、外国語、生活・学習意識調査

また、令和4年度からは、調査の改訂を行い、IRT（項目反応理論）という測定理論を取り入れ、学校や学年の概況の把握だけでなく、個の学力の伸びを小学校から中学校まで継続して把握できるようになっている。IRTを使う調査では、予備調査の結果に基づいて、専門家によって作成された「ものさし」で「学力レベル」を数値化<sup>※7</sup>している。これにより、学年が上がり、問題が変わっても結果を比較することができ、生徒一人ひとりの「学力レベル」が伸びているかを確認することができる。

#### 【調査結果における留意点】

- ・ 平成30年度、令和元年度では各教科とも問題の構成を「基礎・基本」と「活用」としていたが、令和4年度から「知識・技能」と「思考・判断・表現」に変更したこと。
- ・ 令和2年度、3年度は調査を実施していないこと。
- ・ 令和4年度の中学校1年生では外国語の調査を実施していないこと。
- ・ 「学力レベル」が示される調査となっているのは、令和5年度までは、国語と算数・数学の2科目であること。（外国語は令和6年度以降、理科と社会は令和7年度以降の見込み）

※6 ここでの「学力」は、横浜市学力・学習状況調査における学習の理解や習熟の状況を指す。

※7 ※6の「学力」を1（低）～14（高）の段階に分け、その中をさらにA（高）～C（低）の3つに分け、計42段階で示したものを。

平成30年度以降の各教科における平均正答率等は、次のとおりである。

表 横浜市学力・学習状況調査 平成30年度～令和5年度結果（中1）

		中1									
		国語		社会		数学		理科		外国語	
		知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現
R5年度 (全学年4月実施)	附属中(A) 中1:12期中2:11期 中3:10期	86.4%	83.1%	94.5%	94.8%	94.8%	90.4%	95.8%	84.5%	98.8%	95.9%
	市全体(B)	66.0%	62.4%	70.3%	68.5%	60.1%	48.8%	71.2%	58.0%	91.7%	82.9%
	平均正答率の差(C) = (A) - (B)	20.3%	20.7%	24.2%	26.2%	34.7%	41.6%	24.5%	26.6%	7.1%	13.1%
R4年度 (全学年4月実施)	附属中(D) 中1:11期中2:10期 中3:9期	92.2%	87.5%	96.5%	92.2%	95.2%	93.7%	92.3%	96.6%		
	市全体(E)	62.5%	60.3%	75.6%	62.6%	71.7%	66.0%	70.5%	66.7%		
	平均正答率の差(F) = (D) - (E)	29.8%	27.2%	20.8%	29.6%	23.5%	27.6%	21.8%	29.9%		
		国語		社会		数学		理科		外国語	
		基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用
R1年度 中1・2は2月実施 中3は11月実施	附属中(G) 中1:8期中2:7期 中3:6期	88.7%	86.5%	83.6%	86.3%	90.9%	79.3%	82.9%	89.4%	76.2%	32.5%
	市全体(H)	66.1%	63.1%	66.7%	53.3%	69.7%	35.9%	58.2%	45.1%	60.1%	21.8%
	平均正答率の差(I) = (G) - (H)	22.6%	23.4%	16.9%	32.9%	21.2%	43.4%	24.7%	44.2%	16.1%	10.7%
H30年度 中1・2は2月実施 中3は11月実施	附属中(J) 中1:7期中2:6期 中3:5期	88.6%	95.4%	82.1%	85.3%	90.8%	72.7%	77.4%	63.6%	75.7%	28.0%
	市全体(K)	64.8%	69.7%	68.3%	53.0%	70.5%	40.6%	57.2%	36.4%	60.3%	22.8%
	平均正答率の差(L) = (J) - (K)	23.8%	25.7%	13.7%	32.2%	20.4%	32.1%	20.1%	27.2%	15.4%	5.2%

表 横浜市学力・学習状況調査 平成30年度～令和5年度結果（中2）

		中2									
		国語		社会		数学		理科		外国語	
		知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現
R5年度 (全学年4月実施)	附属中(A) 中1:12期中2:11期 中3:10期	95.4%	89.8%	88.8%	84.3%	90.7%	83.2%	89.8%	79.7%	96.3%	83.6%
	市全体(B)	71.4%	65.4%	61.7%	59.0%	65.2%	49.4%	67.3%	60.6%	82.1%	69.7%
	平均正答率の差(C) = (A) - (B)	24.0%	24.4%	27.1%	25.3%	25.5%	33.8%	22.5%	19.1%	14.2%	13.9%
R4年度 (全学年4月実施)	附属中(D) 中1:11期中2:10期 中3:9期	83.1%	94.0%	89.8%	83.2%	92.1%	91.7%	81.9%	87.1%	79.7%	78.4%
	市全体(E)	59.5%	63.7%	63.2%	46.2%	69.7%	59.5%	65.0%	63.6%	68.5%	63.4%
	平均正答率の差(F) = (D) - (E)	23.6%	30.3%	26.6%	36.9%	22.4%	32.1%	16.9%	23.5%	11.1%	15.0%
		国語		社会		数学		理科		外国語	
		基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用
R1年度 中1・2は2月実施 中3は11月実施	附属中(G) 中1:8期中2:7期 中3:6期	82.2%	94.4%	82.3%	55.7%	88.1%	82.2%	81.1%	46.3%	70.4%	43.6%
	市全体(H)	61.6%	68.1%	66.4%	40.5%	64.8%	51.1%	62.8%	26.4%	53.4%	25.3%
	平均正答率の差(I) = (G) - (H)	20.6%	26.3%	15.9%	15.2%	23.3%	31.1%	18.3%	19.9%	17.0%	18.3%
H30年度 中1・2は2月実施 中3は11月実施	附属中(J) 中1:7期中2:6期 中3:5期	90.1%	92.9%	88.7%	84.0%	88.1%	85.8%	79.0%	76.6%	77.6%	42.8%
	市全体(K)	69.9%	66.6%	67.6%	55.1%	66.8%	52.2%	60.3%	56.0%	56.9%	29.4%
	平均正答率の差(L) = (J) - (K)	20.2%	26.4%	21.0%	28.9%	21.3%	33.6%	18.7%	20.6%	20.7%	13.4%



表 横浜市学力・学習状況調査 平成30年度～令和5年度結果（中3）

		中3									
		国語		社会		数学		理科		外国語	
		知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現	知識・技能	思考・判断・表現
R5年度 (全学年4月実施)	附属中(A) 中1:12期中2:11期 中3:10期	89.3%	95.6%	80.9%	81.2%	89.9%	87.1%	79.7%	69.8%	94.9%	88.9%
	市全体(B)	65.5%	71.2%	62.1%	53.8%	68.4%	57.6%	61.5%	54.1%	72.1%	68.0%
	平均正答率の差(C) = (A) - (B)	23.8%	24.4%	18.8%	27.4%	21.5%	29.5%	18.2%	15.6%	22.8%	20.9%
R4年度 (全学年4月実施)	附属中(D) 中1:11期中2:10期 中3:9期	87.5%	89.9%	91.4%	78.6%	90.4%	90.2%	79.2%	86.1%	92.0%	82.6%
	市全体(E)	66.0%	63.4%	68.4%	50.1%	68.4%	66.2%	59.5%	65.4%	70.4%	62.8%
	平均正答率の差(F) = (D) - (E)	21.5%	26.6%	23.1%	28.5%	21.9%	24.1%	19.6%	20.7%	21.6%	19.7%
		国語		社会		数学		理科		外国語	
		基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用	基礎・基本	活用
R1年度 中1・2は2月実施 中3は11月実施	附属中(G) 中1:8期中2:7期 中3:6期	86.7%	88.5%	82.0%	85.0%	90.5%	76.6%	72.0%	57.1%	79.6%	47.6%
	市全体(H)	60.0%	55.1%	64.2%	46.3%	70.1%	38.1%	62.0%	39.6%	63.6%	27.6%
	平均正答率の差(I) = (G) - (H)	26.8%	33.4%	17.8%	38.8%	20.5%	38.5%	10.0%	17.5%	15.9%	20.0%
H30年度 中1・2は2月実施 中3は11月実施	附属中(J) 中1:7期中2:6期 中3:5期	87.4%	86.5%	64.9%	59.0%	89.9%	70.4%	76.1%	78.4%	79.0%	43.4%
	市全体(K)	62.9%	60.4%	63.2%	51.6%	69.6%	37.2%	64.3%	43.7%	62.7%	27.9%
	平均正答率の差(L) = (J) - (K)	24.5%	26.1%	1.7%	7.4%	20.3%	33.1%	11.8%	34.7%	16.4%	15.4%

次に示す表は、令和5年度結果における「平均正答率」「学力レベル」「学力を伸ばした生徒の割合」等、各数値を記載したものである。

表 横浜市学力・学習状況調査 令和5年度結果（学力の伸び等）

	中1							
	国語				数学			
	正答率	学力レベル	学力レベルの伸び(段階数)	学力を伸ばした児童生徒の割合	正答率	学力レベル	学力レベルの伸び(段階数)	学力を伸ばした児童生徒の割合
横浜市全体	63.7%	10-C	2	73.4%	54.4%	8-B	1	54.6%
南高校附属中学校	84.3%	11-A	2	75.9%	92.6%	12-C	2	83.3%

	中2							
	国語				数学			
	正答率	学力レベル	学力レベルの伸び(段階数)	学力を伸ばした児童生徒の割合	正答率	学力レベル	学力レベルの伸び(段階数)	学力を伸ばした児童生徒の割合
横浜市全体	67.9%	10-A	2	71.3%	56.3%	9-B	2	65.4%
南高校附属中学校	92.1%	12-A	3	79.0%	86.5%	13-B	6	85.4%

	中3							
	国語				数学			
	正答率	学力レベル	学力レベルの伸び(段階数)	学力を伸ばした児童生徒の割合	正答率	学力レベル	学力レベルの伸び(段階数)	学力を伸ばした児童生徒の割合
横浜市全体	68.9%	11-B	2	70.9%	62.4%	9-A	1	67.5%
南高校附属中学校	93.0%	13-B	2	74.8%	88.3%	13-C	1	53.5%

#### ○ 南高校附属中学校の傾向について

- 全ての年度の、全ての教科・項目で市全体よりも高い平均正答率となっており、各学年の数値をみても、高い水準を維持している。
- 特に「知識・技能」（平成30年・令和元年における「基礎・基本」）よりも「思考・判断・表現」（平成30年・令和元年における「活用」）の平均正答率が市全体と比較して、高い数値が出ている傾向にある。
- 中学校1年生、中学校2年生では、国語、数学ともに学力を伸ばした生徒の割合が「市全体平均」よりも高く、特に数学では、80%以上の生徒が学力を伸ばしている。
- 中学校3年生では、数学においては学力を伸ばした生徒の割合は、「市全体」よりも低いですが、国語、数学ともに学力レベルが高い水準にある。

上記傾向から、日々の学習において、各学年で身に付けるべき学力が備わっていることが伺える。

## イ 英検の取得状況・CSEスコア<sup>※8</sup>

次に令和2～4年度における南高校附属中学校と南高校の取得状況を示す。また、南高校附属中学校については令和4年度のCSEスコアを、南高校については平成30年度～令和5年度のCSEスコアを、市全体（市立学校）の受験者と比較して示す。

本市では公費による英検受験料の全額助成を行っている。市立高校3年生は、原則2級受験について、年3回ある英検の受験機会の内、第1回目を助成している。市立中学校3年生は、原則3級受験について、第2回目を助成している。

なお、高校及び中学校でも既に2級、3級を取得している生徒については希望により上位級受験を認めている。

### ○ 南高校附属中学校（中学校3年生学年末時点）

南高校附属中学校では、中学校卒業時の学年全体に占める準2級以上の取得率の目標を80%としており、令和4年度にその目標を達成した。

直近の令和4年度では2級や準1級の取得者が多い点も着目すべきである。

表 南高校附属中学校における中学校3年生学年末時点での英検取得者数・取得率

	令和2年度 附属中7期生		令和3年度 附属中8期生		令和4年度 附属中9期生	
準1級	1名	0.6%	2名	1.3%	4名	2.5%
2級	24名	15.0%	29名	18.1%	63名	39.6%
準2級	100名	62.5%	95名	59.4%	62名	39.0%
3級	25名	15.6%	26名	16.3%	22名	13.8%
その他（4級以下、不明・未受験など）	10名	6.3%	8名	5%	8名	5%
準2級以上	125名	78.1%	126名	78.8%	129名	81.1%
合計	160名	100%	160名	100%	159名	100%

※8 英検CSEスコア

全4技能（リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング）で構成される全級共通のスコア表記。

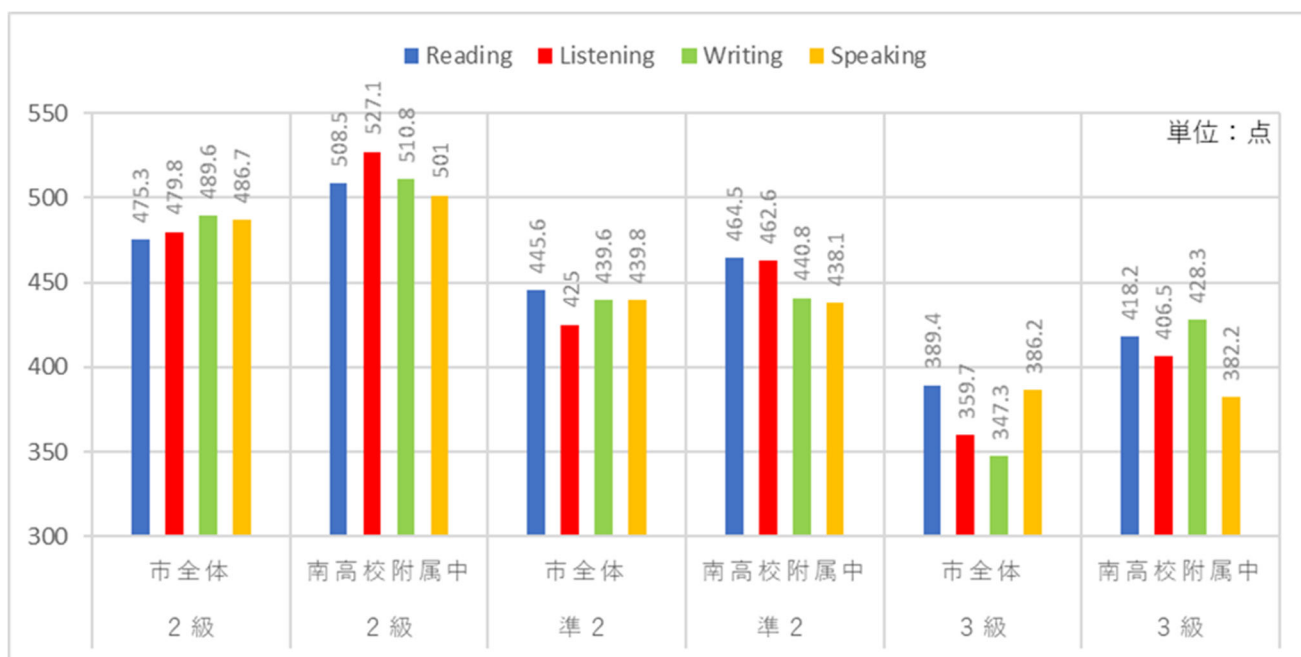


図 令和4年度 英検 CSE スコア 受験者平均

CSEスコアを市全体と比較すると、4技能全てでおおむね市全体の平均スコアよりも高い傾向が見られる。

令和4年度における南高校附属中学校と市全体の級別の英検受験者数は、次のとおりである。市全体では3級受験者が最も多く約58%であるのに対し、南高校附属中学校は2級受験者が最も多い。

表 南高校附属中学校と市全体の級別の英検受験者数（令和4年度）

R4年度 (中9期生/高70期生)		2級	準2級	3級	4・5級	受験者計
南高校 附属中学校	割合	59.6%	32.9%	7.5%	0.0%	100%
	人数	87人	48人	11人	0人	146人
市全体	割合	11.6%	21.5%	57.8%	9.0%	100%
	人数	2,910人	5,385人	14,469人	2,260人	25,024人

○ 南高校（高校3年生学年末時点）

南高校では、高校卒業時の学年全体に占める2級以上の取得率の目標を80%としており、令和4年度にその目標を達成した。

令和2年度と4年度には1級の取得者が複数名いる点や準1級の取得率が増加している点にも着目すべきである。

表 南高校における高校3年生学年末時点での英検取得者数・取得率

	令和2年度 高校65期生		令和3年度 高校66期生		令和4年度 高校67期生	
1級	3名	1.6%	0名	0.0%	4名	2.1%
準1級	46名	24.5%	54名	28.9%	61名	31.8%
2級	87名	46.3%	94名	50.3%	93名	48.4%
準2級	38名	20.2%	14名	7.5%	17名	8.9%
その他（3級以下・不明・未受験など）	14名	7.4%	25名	13.4%	17名	8.9%
2級以上	136名	72.3%	148名	79.1%	158名	82.3%
合計	188名	100%	187名	100%	192名	100%

CSEスコアを市全体と比較すると、高校3年生段階では、全ての年度、全ての項目において、市全体平均よりも高く、バランスよく英語力を身に付けていると考えられる。項目別にみるとライティング（Writing）が特に高い傾向があることが伺え、全体としては平成30年度から緩やかではあるが伸びが見られる。

また、市立高校別で比較すると、過去6か年中5か年で、4技能全てにおいて最高スコアとなっている。（令和元年度のみ3技能が最高スコア）

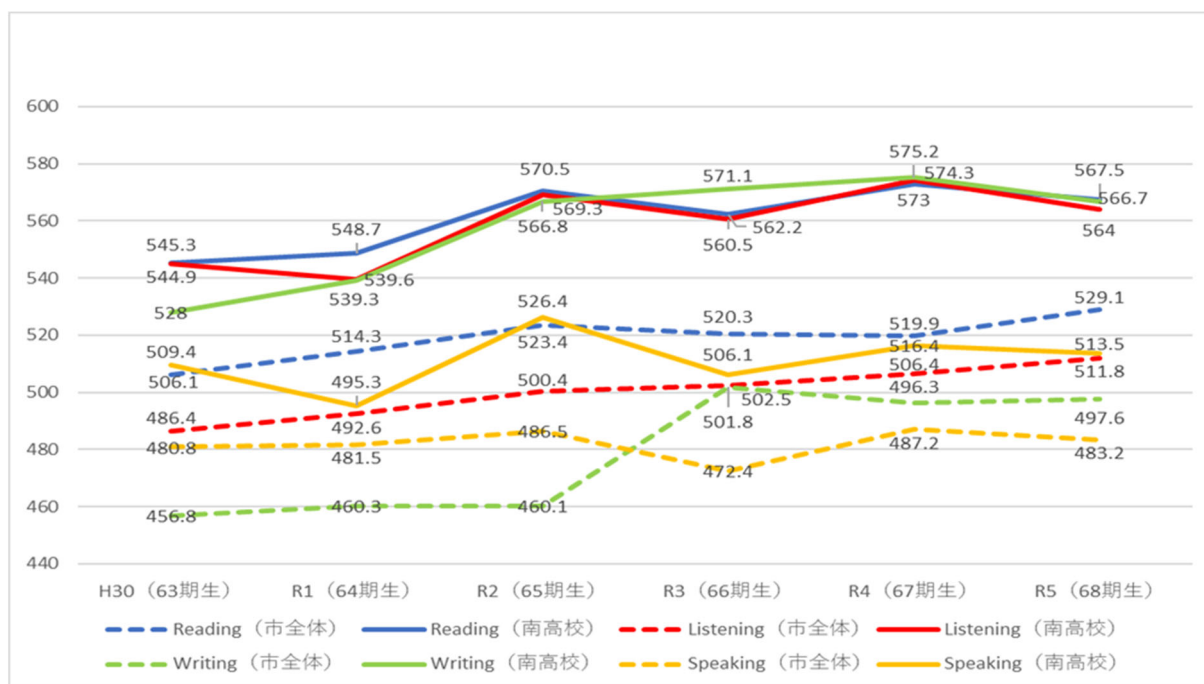


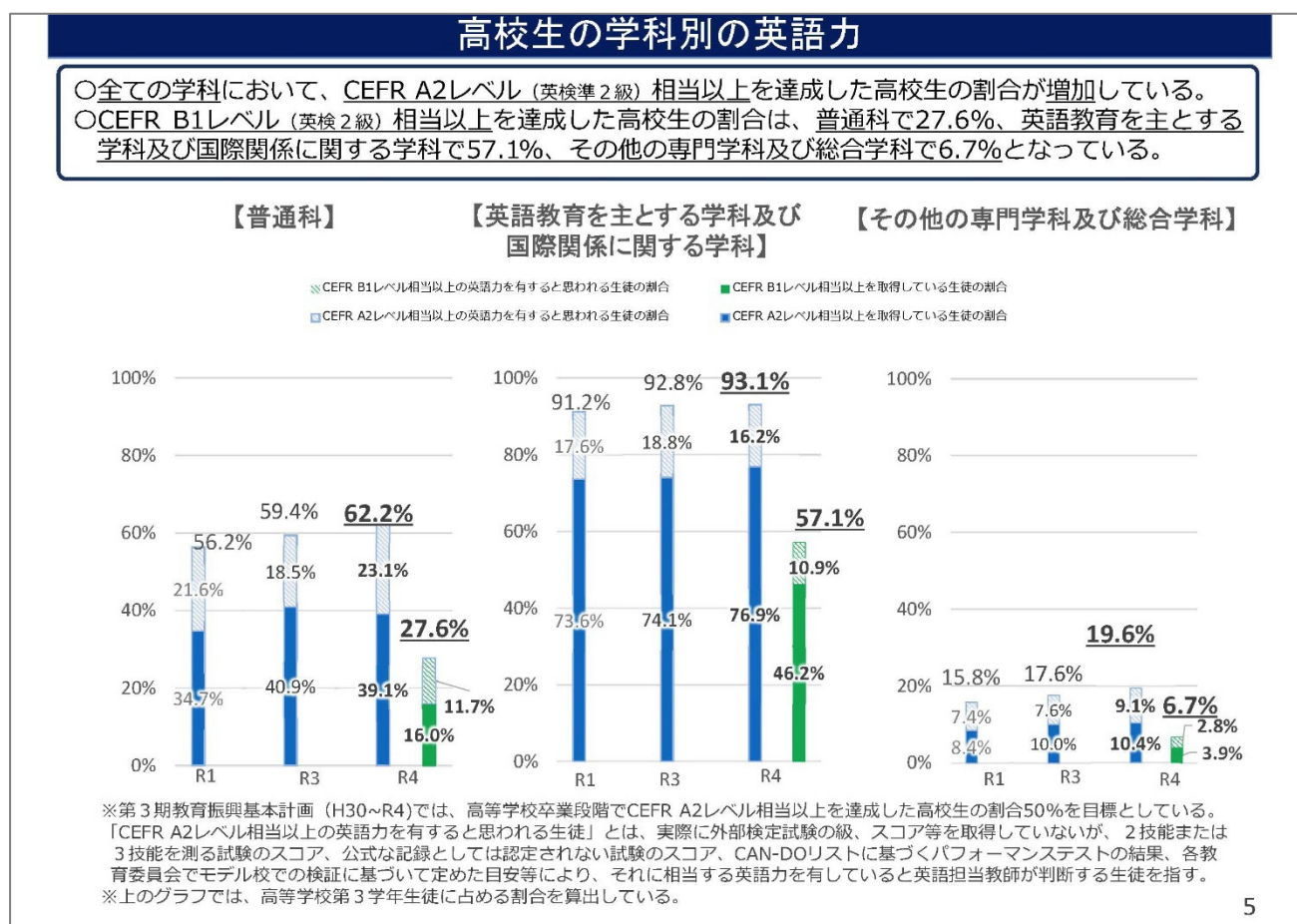
図 英検 CSE スコア 受験者平均値 推移（平成30年度～令和5年度）

令和5年度における南高校と市全体の級別の英検受験者数は、次のとおりである。市全体では2級受験者が最も多く約73%であるのに対し、南高校は準1級受験者が最も多い。また、南高校においては、平成30年度以降、準1級以上の受験者数が増加傾向にある。

表 南高校と市全体の級別の英検受験者数（令和5年度）

R5年度（高68期生）		1級	準1級	2級	準2級	3級以下	受験者計
南高校	割合	8.3%	64.1%	25.5%	2.1%	0.0%	100%
	人数	16人	123人	49人	4人	0人	192人
市全体	割合	1.6%	22.3%	72.8%	2.7%	0.6%	100%
	人数	35人	474人	1,549人	58人	12人	2,128人

【参考】全国の高校生の英語力（学科別）



出典：文部科学省 令和4年度「英語教育実施状況調査」概要

図：高校生の学科別の英語力

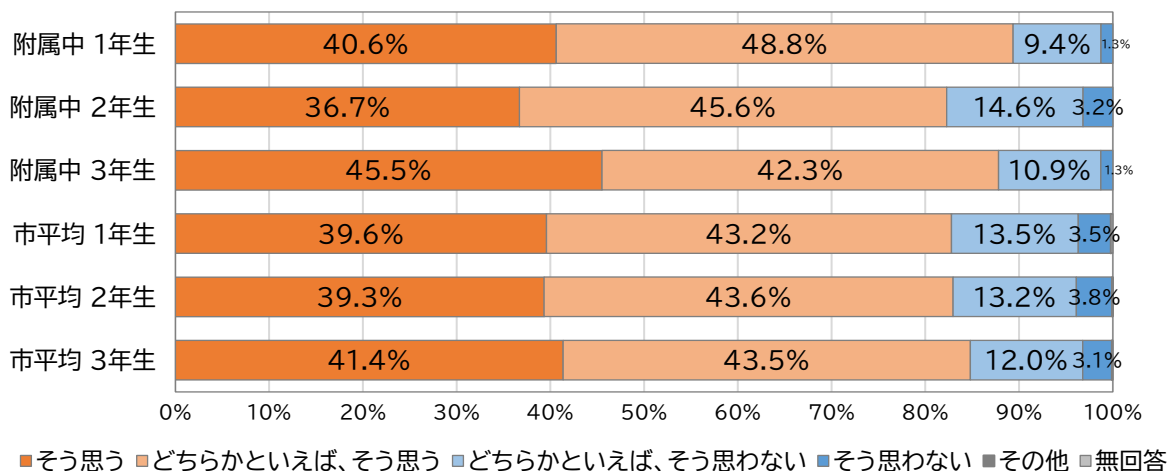
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1415043\\_00004.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00004.htm)

ウ 横浜市学力・学習状況調査（生活・学習意識調査）

令和5年度の横浜市学力・学習状況調査（生活・学習意識調査）における南高校附属中学校の生徒の回答は、次のとおりである。

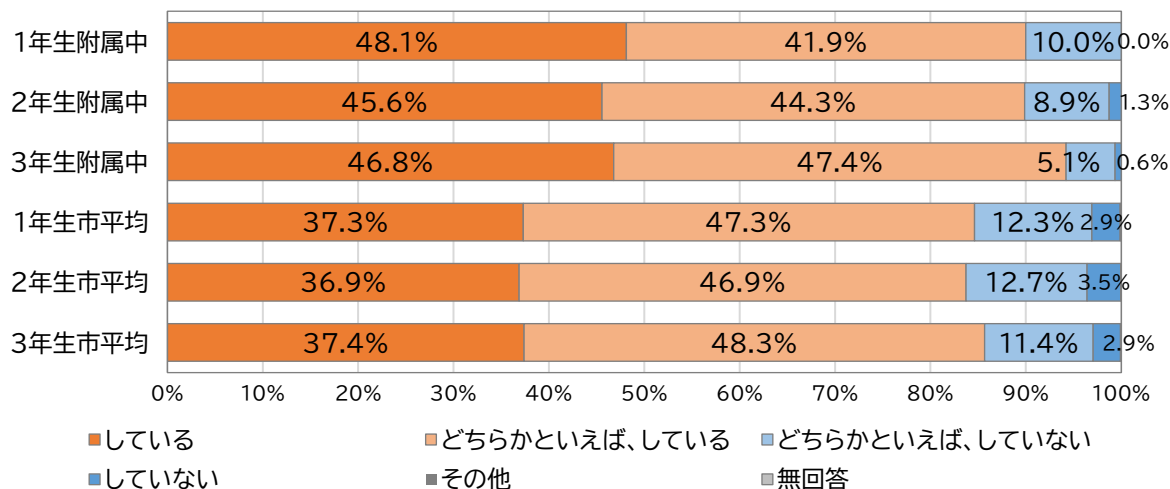
○ 問 33 気になったことがあると、とことん調べたいと思いますか。

附属中学校の生徒は1年生と3年生において、「そう思う」と回答した割合が市平均よりやや高い。特に3年生は3学年中最も「そう思う」割合が高い。



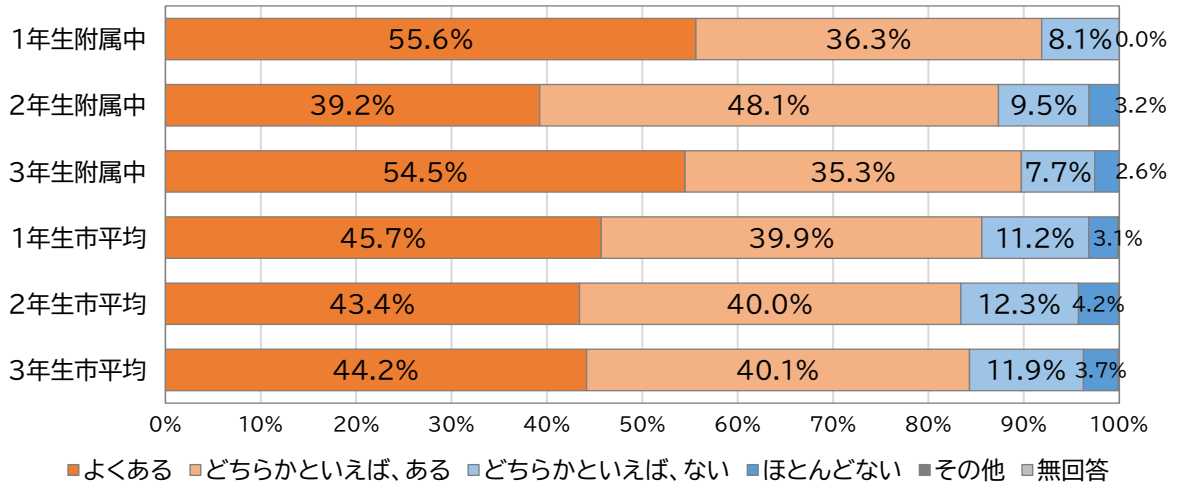
○ 問 34 うまくいかないときには、なぜできないのかを考え、やり方を変えたり、次の方法を試したりしていますか。

附属中学校の生徒はいずれの学年においても、うまくいかないときに、なぜできないのかを考え、やり方を変えたり、次の方法を試したり「している」割合が市平均より約10ポイント高い。



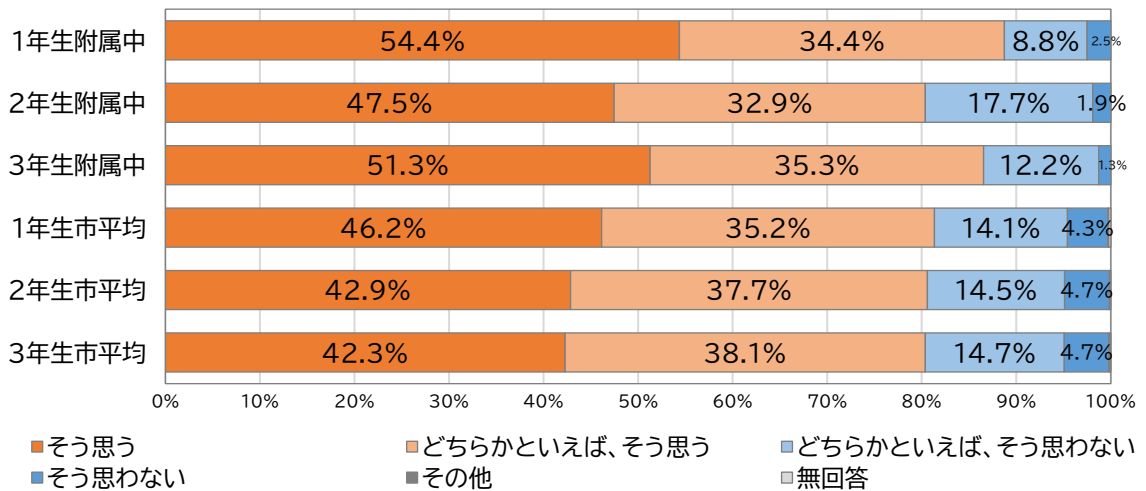
○ 問 35 「不思議だな」「もっと知りたいな」と思うことがありますか。

附属中学校の生徒は1年生と3年生において、「よくある」と回答した割合が市平均より約10ポイント高く50%以上となっている。また、2年生は、市平均よりも下回っている。



○ 問 44 身の回りにはいろいろなことに興味をもつほうだと思いますか。

附属中学校の生徒はいずれの学年においても、「そう思う」と回答した割合が市平均より高い。特に1年生と3年生は50%以上となっている。





## (2) 自ら考え、自ら行動する力の育成

教育目標「自ら考え、自ら行動する力の育成」の達成状況を総合的な学習・探究の時間の取組から分析した。

分析にあたっては、学校評価や第三者評価、SGH研究開発実施報告書、学校評価における評価と考察を用いた。

### ア 総合的な学習・探究の時間（EGG・TRY&ACT）の成果

#### ○ 文章記述による評価

附属中学校のEGGにおいては、「おおむねねらいを達成し、生徒にとって充実した活動になっていた」（平成27年度～令和4年度 学校評価〈自己評価〉）、「EGGの存在により南高校のTRY&ACTもより理解しやすい教育構造」（令和元年度 学校評価〈学校関係者評価〉）、「確実に生徒の思考力・判断力・表現力を育成している」（令和元年度 第三者評価）などの評価を得ていた。

一方で、「中学校の『総合的な学習の時間（EGG）』をさらに高等学校で発展・充実させ、探究的な学習としてより充実が求められる。」（令和3年度 学校評価〈学校関係者評価〉）という、中高の接続についての課題が挙げられた。

高校のTRY&ACTにおいては、「課題解決しようとする意欲が感じられる」（令和2年度 自己評価）、「教育課程上における『総合的な探究の時間（TRY&ACT）』を活用し、生徒一人一人の課題に基づいた研究を行っていることは、高く評価できる」（令和2年度 学校関係者評価）、「校内外からの出席者から高い評価※を受けた。」（令和元年度 SGH研究開発実践報告書）などの評価を得ていた。

#### ※校内外からの出席者からの評価（評価アンケートの集計）

1年生と2年生全員の研究成果の発表を聴いた校外からの参加者、保護者、担当教員、生徒に対して、5つの評価項目（プレゼンテーション力、課題発見力、実現可能性、コミュニケーション力、チームワーク）を、4段階で評価してもらったもので、結果は以下のとおりであった。

##### ○平成29年度

教員の1年生発表分以外はすべて「4点：よくできている」と「3点：できている」の間におさまる高い評価となっていた。

##### ○平成30年度、令和元年度

総じて「4点：よくできている」と「3点：できている」におさまる高い評価となっていた。

EGG・TRY&ACTそれぞれでは、ともに良い評価を得られている。一方で、附属中学校から高校への「接続」という観点では、EGGとTRY&ACTの内容的繋がりを持たせていくことが今後の課題であると考えられる。

○ 学校評価の数値による評価

令和3、4年度の学校評価の質問7（附属中学校：『総合的な学習の時間』では、主体的に考え、行動し、課題解決ができるようになった。」 高校：『総合的な探究の時間』では、主体的に考え、行動し、課題解決ができるようになった。）」において、「十分に実現できている」「おおむね実現できている」と回答した生徒の割合を次に示す。

令和4年度は、附属中学校では94.3%、高校では87.1%の生徒が「十分に実現できている」「おおむね実現できている」と回答していた。高校については、令和3年度から数値が上昇したが、全体として附属中学校の方が高い傾向にある。今回は2か年みの比較であるため、今後は継続的に経年変化を見ていく必要がある。

表 学校評価（生徒評価） 総合的な探究の時間

質問	令和3年度							
	附属中1年	附属中2年	附属中3年	附属中(平均)	高校1年	高校2年	高校3年	高校(平均)
質問7	94.9%	96.1%	92.3%	94.4%	88.2%	71.3%	81.9%	80.5%
質問	令和4年度							
	附属中1年	附属中2年	附属中3年	附属中(平均)	高校1年	高校2年	高校3年	高校(平均)
質問7	94.9%	92.3%	95.7%	94.3%	92.0%	87.0%	82.1%	87.1%

## イ その他の成果・実績

高校2年生の希望する生徒には、主体的な取組や成果から社会的事象をグローバルな視点から捉え、課題解決する姿勢を養うために独自の育成システムである「グローバルリーダープロジェクト（GLP）」を勧めている。

その活動の中で、毎年度、日本政策金融公庫主催の「高校生ビジネスプラン・グランプリ」に出場し、ビジネスプランの作成を通じ、様々な力を養っている。

令和元年度以降の受賞歴を下表に示す。未開催だった令和2年度を除き、毎年高校生ビジネスプラン・ベスト100以上の受賞を続けている。令和5年度には46名、16チームで出場し、応募総数5,014件の中から審査員特別賞1組（全国ベスト5）、高校生ビジネスプラン・ベスト100に3組が入賞する成果を残した。

表 高校生ビジネスプラン・グランプリの受賞歴（令和元年度～令和5年度）

年度	プラン名	受賞結果
令和元年度	GREENなBEANが熱中症対策にE E ～安心して運動を～	優秀賞（ベスト10）
	「わらぶくろ」で鹿を救おう！	高校生ビジネスプラン・ ベスト100
令和2年度	開催なし	
令和3年度	ORIGAMI BOX	セミファイナリスト賞
令和4年度	靴カエサセナイ	優秀賞（ベスト10）
	便利工夫財布（ベリーグッドウォレット）	高校生ビジネスプラン・ ベスト100
	レジ袋のリサイクルでポイントゲット！	
	目覚め方改革！～熱・音・光であなたを目覚めに導く～	
ear θ ～地球と人をつなぐ耳栓～		
令和5年度	地球温暖化を糸状藻類で止めろ バイオ燃料と 土壌改良材の二刀流	審査員特別賞 （ベスト5）
	Meta Hama Revolution ～国際交流革命～	高校生ビジネスプラン ・ベスト100
	めくる傘～街から傘用ビニール袋をなくしたい～	
	キャポット～廃棄キャベツ製！土に還る育苗ポット～	

表 各種大会・コンクール等の入賞実績

平成 31 年度 令和元年度

中/高	個人/グループ	内容
高	個人	第 51 回国際化学オリンピックフランス大会 銀メダル
高	グループ	第 7 回 2019 年度日本政策金融公庫高校生ビジネスプラン・グランプリ 優秀賞 (ベスト 10)
高	個人	全国高等学校総合体育大会弓道競技 全国大会出場

令和 2 年度

中/高	個人/グループ	内容
高	個人	第 20 回日本情報オリンピック 全国大会出場
高	グループ	パソコン甲子園 2020 プログラミング部門 全国大会出場
中	グループ	第 9 回科学の甲子園ジュニア 全国大会出場 (神奈川県代表)
中	グループ	第 64 回日本学生科学賞神奈川県作品展 神奈川県科学教育振興委員会賞

令和 3 年度

中/高	個人/グループ	内容
高	個人	第 19 回高校生・高専生科学技術チャレンジ 敢闘賞
高	個人	第 21 回日本情報オリンピック 全国大会出場 第 32 回国際情報オリンピック 日本代表選考会出場
高	グループ	パソコン甲子園 2021 プログラミング部門 全国大会出場
高	グループ	第 27 回スーパーコンピューティングコンテスト 2021 全国大会出場
中	グループ	第 66 回日本学生科学賞中央審査会 (全国大会) 日本科学未来館賞
中	個人	第 65 回日本学生科学賞神奈川県作品展 神奈川県知事賞
中	個人	第 65 回日本学生科学賞神奈川県作品展 県立青少年センター館長賞

令和 4 年度

中/高	個人/グループ	内容
高	グループ	第 10 回 2022 年度日本政策金融公庫高校生ビジネスプラン・グランプリ 優秀賞 (ベスト 10)
高	個人	第 13 回坊ちゃん科学賞研究論文コンテスト 優良賞
高	グループ	第 28 回スーパーコンピューティングコンテスト 2022 全国大会出場 (2 チーム)
高	グループ	パソコン甲子園 2022 プログラミング部門 全国大会出場 (10 位)
高	個人	第 22 回日本情報オリンピック 全国大会出場 (5 名) 第 3 回日本女子情報オリンピック 全国大会出場 第 3 回ヨーロッパ女子情報オリンピック 日本代表選考会出場
中	個人	第 66 回日本学生科学賞神奈川県作品展 神奈川県科学教育振興委員会賞

令和5年度

中/高	個人/グループ	内容
高	グループ	第11回2023年度日本政策金融公庫高校生ビジネスプラン・グランプリ 審査員特別賞
高	グループ	第29回スーパーコンピューティングコンテスト2023 全国大会出場 (2チーム)
高	グループ	パソコン甲子園2023 プログラミング部門 全国大会出場(9位)
高	個人	第23回日本情報オリンピック 全国大会出場(2名)
高	グループ	2023年度全国高校生ビジネスプランコンテスト(日本経済大学) 審査員賞
高	個人	第69回青少年読書感想文全国コンクール 横浜市教育委員会賞受賞 全国コンクール選出

### (3) 未来を切り拓く力の育成

教育目標「未来を切り拓く力の育成」の達成状況を進学実績や卒業後のモデルケース（就職・海外大学・大学院等への進学）から分析した。

#### ア 大学合格実績

平成 25 年度～令和 5 年度の大学合格実績を次に示す。

附属中学校の 1 期生が大学入試を受験した平成 30 年度以降、国公立大学合格者数、難関国公立大学合格者数、難関私立大学合格者数はいずれも増加している。特に難関国公立大学については、附属中学校設立前と比較して大幅に増加している。

また、高入生の国公立大学合格者数に着目すると、卒業者数あたりの合格者数が増加傾向にある。

海外大学については、令和 4 年度、5 年度は 0 人であったが、これは新型コロナウイルス感染症の影響があったものと推察される。令和 6 年度以降、海外大学への進学を希望する生徒が増えていくことが期待される。

表 年度別大学合格者の推移（人）

年度	高校	附属中	卒業時 学級数	国公立 合格者数		難関国公立 大学 合格者数		東京大学		一橋大学		東京工業 大学		京都大学		医学部 医学科 (国公)		難関私立 大学 合格者数		早稲田 大学		慶應義塾 大学		上智大学		海外大学 合格者数	
平成25年度	57期生		8学級	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	13	2	7	0						
平成26年度	58期生		8学級	22	1	0	0	0	0	0	0	1	17	15	1	1	0										
平成27年度	59期生		5学級	23	1	0	0	1	0	0	0	26	14	5	7	0											
平成28年度	60期生		5学級	14	0	0	0	0	0	0	0	19	9	4	6	0											
平成29年度	61期生		5学級	18	0	0	0	0	0	0	0	23	14	6	3	0											
平成30年度	62期生	1期生	5学級	62	(3)	12	(0)	5	(0)	1	(0)	5	(0)	0	(0)	1	(0)	56	(0)	25	(0)	12	(0)	19	(0)	4	(0)
平成31年度	63期生	2期生	5学級	73	(3)	15	(0)	8	(0)	1	(0)	2	(0)	1	(0)	3	(0)	80	(0)	50	(0)	21	(0)	9	(0)	3	(1)
令和2年度	64期生	3期生	5学級	78	(5)	19	(0)	7	(0)	3	(0)	7	(0)	0	(0)	2	(0)	87	(1)	48	(1)	24	(0)	15	(0)	8	(0)
令和3年度	65期生	4期生	5学級	82	(4)	18	(0)	1	(0)	5	(0)	2	(0)	3	(0)	7	(0)	105	(6)	61	(3)	30	(3)	14	(0)	3	(0)
令和4年度	66期生	5期生	5学級	79	(2)	19	(0)	6	(0)	7	(0)	2	(0)	0	(0)	4	(0)	111	(0)	58	(0)	29	(0)	24	(0)	0	(0)
令和5年度	67期生	6期生	5学級	73	(7)	27	(1)	12	(0)	7	(0)	3	(1)	1	(0)	4	(0)	135	(4)	59	(3)	43	(1)	33	(0)	0	(0)

※ 合格者数には、既卒生を含む。「高校」、「附属中」、「卒業時学級数」は現役生について記載したもの。

※ ( ) 内の数字は高入生（内数）

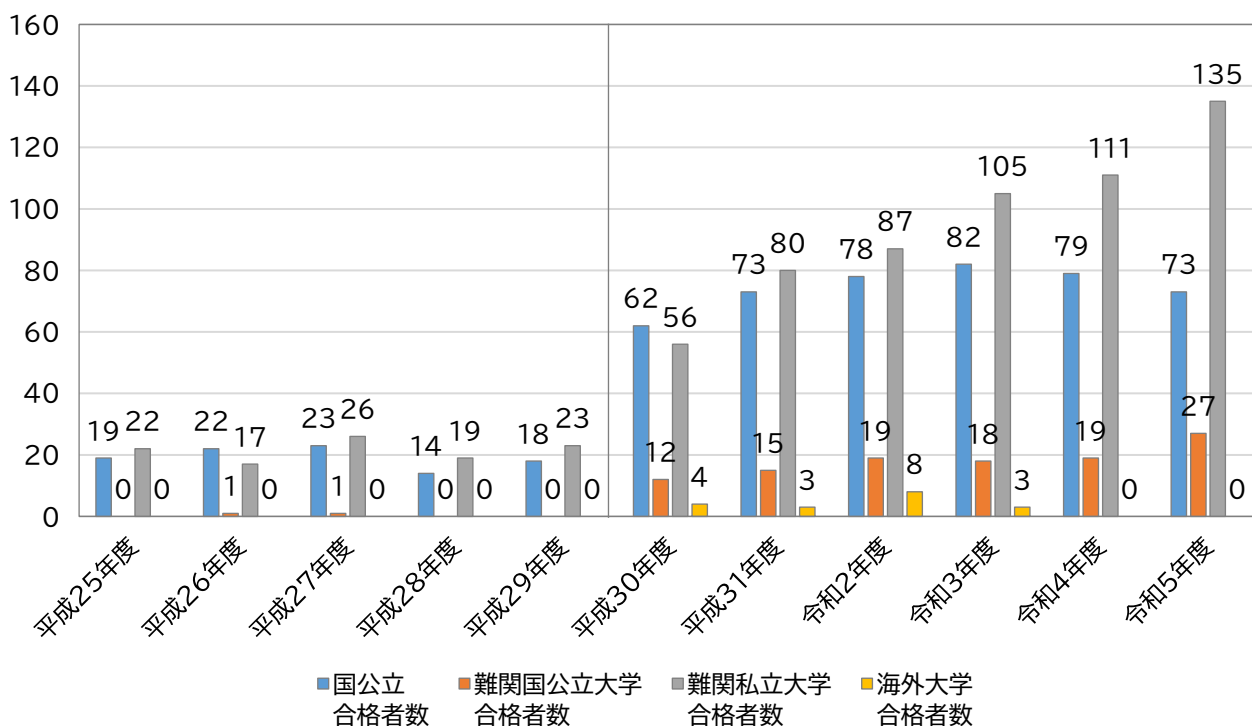


図 年度別大学群別合格者数（人）

## イ 卒業後の進路

卒業した生徒の進路の事例を、高校 62 期生・63 期生<sup>※9</sup>から 4 名紹介する。それぞれが在校時の経験を生かして活躍している様子が伺える。

表 卒業生の進路

生徒	進路内容
A さん (高入生)	在校中は海外に留学。在校当時からグローバル社会に興味があり、大学は、留学生の多い大学を選択。大学のゼミやインターンシップでも留学生や海外の学生とも交流した。現在は、IT ベンチャー系の会社に勤務。
B さん (中入生)	在校中は文化委員を務め、生徒会行事への取組に力を入れていた。大学では、心理学を専攻。高校時代から企画・運営をしていた経験と大学での学びを生かして、現在はテレビ局勤務。
C さん (中入生)	在校中はグローバルリーダープロジェクト（GLP）に参加。在校当時から多くの本を読み、大学は文学部を選択。大学では出版社でのインターンで、実際に記事を書く経験をし、出版社に就職。
D さん (高入生)	在校中は、運動部で活躍。文武両道で勉強と部活に取り組んだ。在校中から英語が得意で、大学では、イギリスで、国連関連のインターンシップに参加した。

※9 卒業生の年齢

高校 62 期生（附属中学校 1 期生）：令和 5 年度に 24 歳になる学年

高校 63 期生（附属中学校 2 期生）：令和 5 年度に 23 歳になる学年



## 2 生徒や教職員等の意識

### (1) 学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成

#### ア 調査結果概要

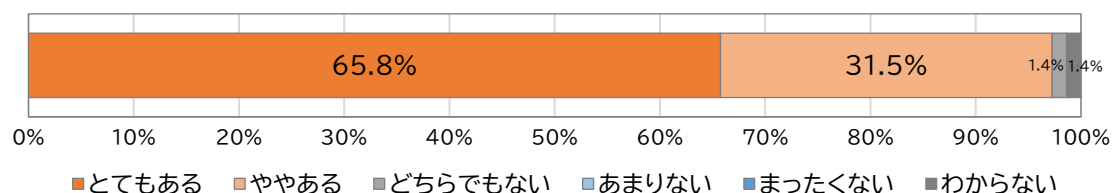
「生徒が学ぶことへの探究心があると思っている」と、約 97%の教職員が答えており、教職員は、生徒を、学習への意識が高く、向上心があると捉えていることが伺える。

#### イ アンケート調査結果

- 教職員の意識に着目すると、約 97%の教職員が、生徒は学ぶことへの探究心が「とてもある」「ややある」と思っており、そのうち、生徒は学ぶことへの探究心が「とてもある」と思っているのは、約 66%である。

2. (1)南高等学校・附属中学校の生徒は、学ぶことへの探究心があると思いますか？

教職員アンケート



#### ウ アンケート自由記述・ヒアリング調査結果

アンケートの自由記述及びヒアリング調査では、「挙手制の授業をもう少し多くしたほうが、自分から取り組む力がつく気がする（生徒・中1）」「適性検査を経て入学していることもあり、向上心が高い生徒が多い。（教職員・中学校）」「ポテンシャルが高いので、さらに伸びると考えている。（教職員・高校）」といった意見が挙げられた。これらは、生徒の学ぶことへの探究心の表れであると推察できる。

## (2) 自ら考え、自ら行動する力の育成

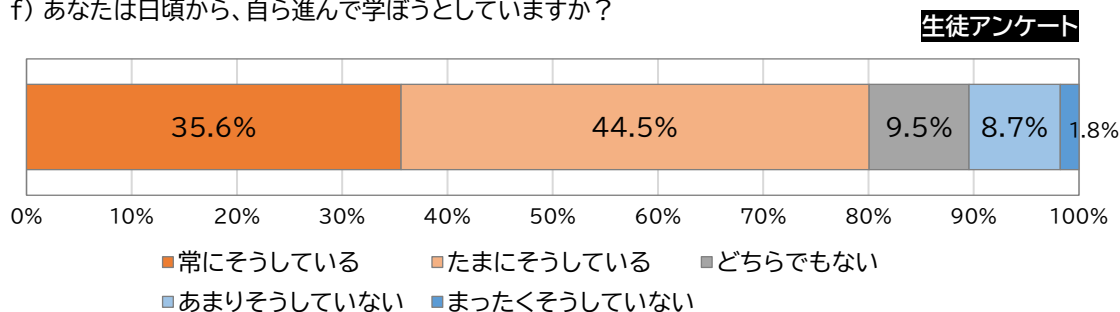
### ア 調査結果概要

日頃から、自ら進んで学ぼうとしている生徒は、学年別や入学時期の違いによって多少差はあるが、生徒全体として「常にそうしている」「たまにそうしている」生徒は、80%を超えている。また、「生徒は自ら考え自ら行動する力があると思っている」と答えた教職員は約80%であり、教職員は生徒を、自発的に考え、行動する力があると捉えていることが伺える。

### イ アンケート調査結果

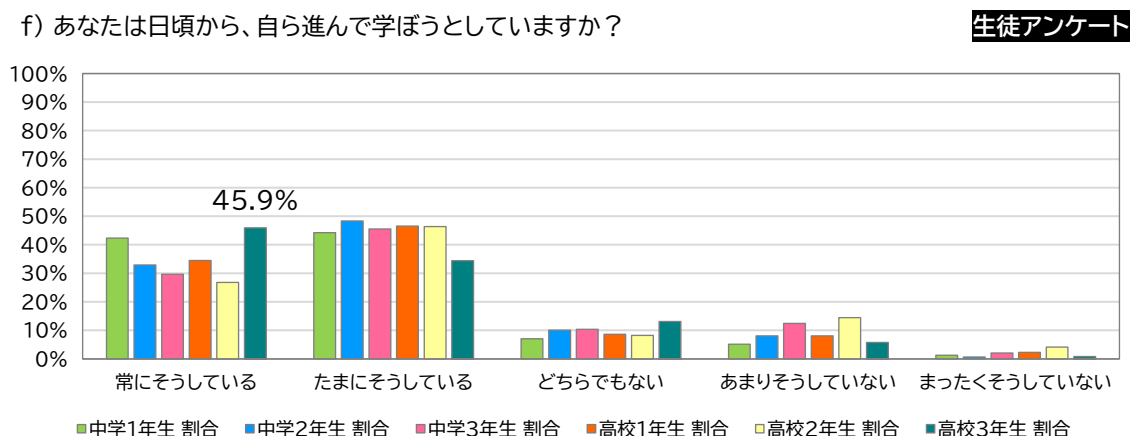
- 自ら進んで学ぶことについて、「常にそうしている」「たまにそうしている」生徒は、約80%であり、「あまりそうしていない」「まったくそうしていない」生徒は、約11%であった。

f) あなたは日頃から、自ら進んで学ぼうとしていますか？



- 学年別に比較すると、「常にそうしている」生徒の割合は、高校3年生で比較的高い。

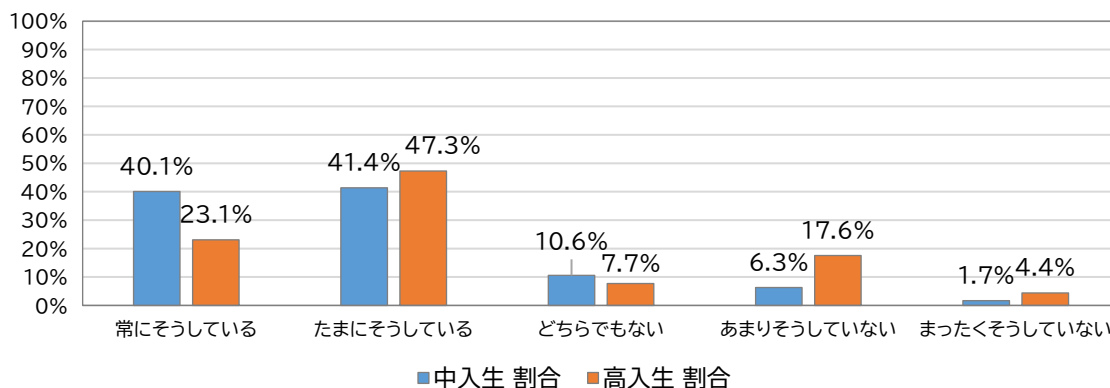
f) あなたは日頃から、自ら進んで学ぼうとしていますか？



- また入学時期別に比較すると、「常にそうしている」「たまにそうしている」生徒は、中入生が約 82%、高入生が約 70%であり、「あまりそうしていない」「まったくそうしていない」生徒は、中入生が約 8 %、高入生が約 22%であった。

f) あなたは日頃から、自ら進んで学ぼうとしていますか？

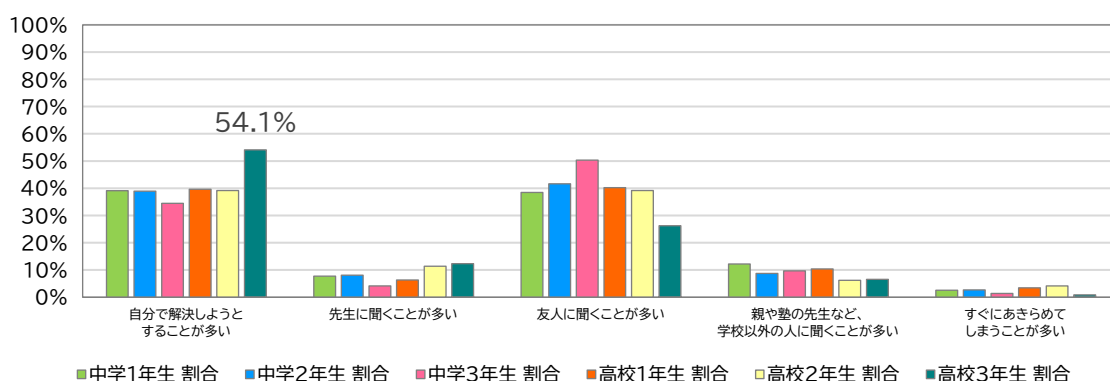
**生徒アンケート**



- さらに、学習で分からないことがあった時の対応を学年別に比較すると、「自分で解決しようとすることが多い」と回答したのは高校3年生が最も多く、約 54%であった。

g) あなたは学習で分からないことがあった時、どうすることが多いですか？

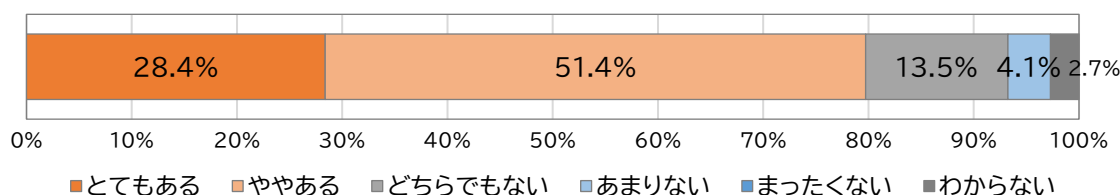
**生徒アンケート**



- また、約 80%の教職員が、生徒は自ら考え自ら行動する力が「とてもある」「ややある」と思っており、そのうち、生徒は自ら考え自ら行動する力が「とてもある」と思っているのは、約 28%であった。

2. (2)南高等学校・附属中学校の生徒は、自ら考え自ら行動する力があると思いますか？

**教職員アンケート**



## ウ アンケート自由記述・ヒアリング調査結果

アンケートの自由記述及びヒアリング調査では、「自分で考えて、仲間と共有するような授業が多い。(生徒・中1)」「目的をもって入ってきた生徒が多いので、すごく前向きであると感じる。(教職員・中学校)」「生徒に対しては、自主自立の精神で、主体的に行動するように指導している。(教職員・高校)」といった意見が挙げられた。

これらより、生徒自身も自ら考えて行動する意識があり、教職員も主体的に行動する指導をしており、双方の意識が共通していることが伺える。

### (3) 未来を切り拓く力の育成

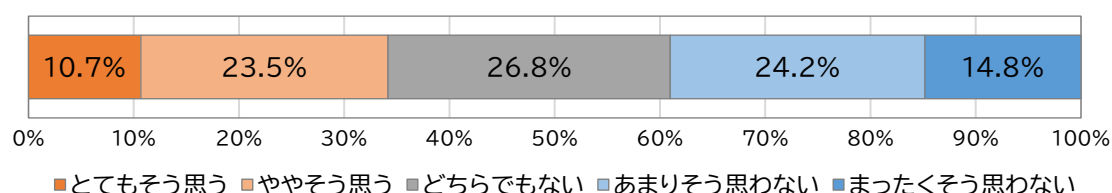
#### ア 調査結果概要

将来、国際機関やグローバル企業のリーダーとして活躍することを視野に入れている生徒は、そうでない生徒より少なく約34%であった。一方で、将来、地域や日本をけん引できるような人間になりたいかという質問に「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答した生徒は約60%であった。

#### イ アンケート調査結果

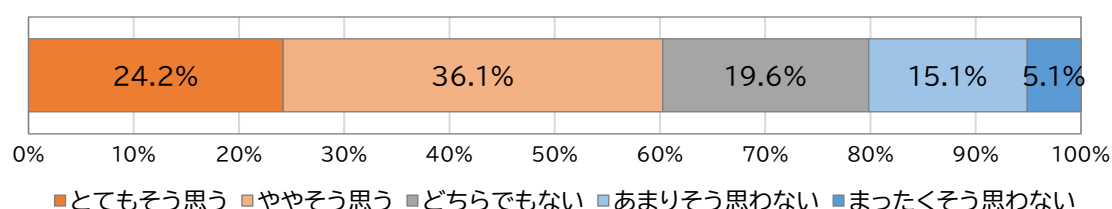
- 将来、国際機関やグローバル企業のリーダーとして活躍したいかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」生徒は、約34%であり、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」生徒は、約39%であった。

5. (5) 将来は、国際機関やグローバル企業のリーダーとして活躍したいと考えていますか？ **生徒アンケート**



- 将来、地域や日本をけん引できるような人間になりたいと「とてもそう思う」「ややそう思う」生徒は約60%であった。

5. (1) 将来は、地域や日本をけん引できるような人間になりたいと思いますか？ **生徒アンケート**



### 3 考察

#### ○ 教育目標：学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成

スクール・ミッション：国際社会及び日本における課題の発見・解決に資する知識・技能の習得

- ・学力・学習状況調査及び英検の調査結果において、全体的に高い数値が出ており、各成長段階において必要な学力を身に付けられていることがわかる。
- ・市全体平均との比較では、「知識・技能」よりも「思考・判断・表現」が更に高い傾向にあり、これは教育課程において、南高校附属中学校が資質・能力の育成に向けた魅力ある取組として行っている「主体的・対話的で深い学び」や「体験的、課題解決的、発展的な学習」等による成果であると言える。
- ・英検の取得状況では、南高校附属中学校は準2級以上、南高校は2級以上の取得率の目標をそれぞれ80%としているが、ともに令和4年度にその目標を達成している。
- ・中学校の生活・学習意識調査や本検証のアンケート調査結果から、生徒が比較的高い意識のもと学びに取り組んでいることや探究心が高い傾向があることが伺える。
- ・大学合格実績（教育目標「未来を切り拓く力の育成」の検証部分に記載）を見ると、高校段階においても大学入試に向けて、学力や資質・能力を伸ばしていることが伺える。

#### ○ 教育目標：自ら考え、自ら行動する力の育成

スクール・ミッション：思考力、判断力、表現力等の育成

- ・アンケート調査や学校評価の結果から、生徒は「自ら学ぼうとすること」や「自ら考え、自ら行動すること」に対して、高い意識を持っており、教職員も「生徒は主体的に行動する力がある」と認識している。
- ・総合的な学習・探究の時間は、各種大会・コンクール等の入賞の実績に取組の成果が見られる。また、学校評価や第三者評価等の結果から、生徒、学校、学校関係者から一定の評価を得られていることがわかる。一方で、令和3年度の学校関係者評価において「附属中学校の『総合的な学習の時間（EGG）』をさらに高等学校で発展・充実させ、探究的な学習としてより充実が求められる」と課題が挙げられており、「総合的な学習の時間（EGG）」と「総合的な探究の時間（TRY&ACT）」について、「探究」という視点を強く意識し、6年間を見通した活動としていく必要がある。

## ○ 教育目標：未来を切り拓く力の育成

### スクール・ミッション：国際社会で活躍できるグローバル人材の育成

- ・附属中学校の1期生が大学入試を受験した平成30年度以降、国公立大学合格者数、難関国公立大学合格者数、難関私立大学合格者数はいずれも増加するなど、着実に合格実績を上げていることから、附属中学校設立時から目指してきた基礎基本に基づいた高い学力の習得及び生徒が希望する進路への実現について成果が見られる。
- ・高校卒業後の進路の事例では、在校時に習得した知識や技能、経験を生かし、自らのキャリアプランをしっかりと描きながら、自己実現に向けて着実に歩んでいる卒業生も見られ、将来、自身の得意分野を生かし、国際的に活躍する人材となっていくことが期待できる。
- ・一方で、アンケート調査結果をみると、「国際的なリーダーとして活躍したい」と考えている生徒は「とてもそう思う」「ややそう思う」をあわせても約34%であり、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」をあわせた約39%を下回っている。また「将来、地域や日本をけん引したい」と思っている生徒も、約60%にとどまっており、学校が目標としている「南高校が目指すグローバルリーダー」の育成に向けて課題がある。

以上のことから、教育目標及びスクール・ミッションの実現に向けた取組については一定の成果が認められるが、総合的な学習・探究の時間での取組や「南高校が目指すグローバルリーダー」の育成に向けては課題がある。「EGG」と「TRY&ACT」については、中高の接続に重点を置いたカリキュラムの見直しを行うとともに、「グローバル人材の育成」の達成に向けて、「将来、国際的に活躍したい」という生徒の思いが具体的に描いていけるよう、キャリア教育の視点から6年間で育成する資質・能力を再整理して改善・充実を図る必要がある。

なお、「グローバル人材の育成」につながるグローバルな視点の定着・グローバル教育の実践状況については、論点1-2において、具体的に検証をしていく。

## 論点 1 - 2 : グローバルな視点の定着、グローバル教育実践状況について

### 1 取組の成果・実績

#### (1) 海外への留学・留学生の受入れ状況

海外への留学、海外からの留学生の受入れの状況は次のとおりである。

##### ア 海外への留学（高校 62 期生以降）

海外への留学は、学年ごとに 1～4 名程度が参加しており、高校 62 期生から 68 期生までで計 14 名が留学をしている。

行先別にみると、アメリカが最も多く 8 名、次いでカナダが 2 名である。

表 海外への留学者数の学年別人数（高校 62 期生以降）

学年	人数
62 期生	3 名
63 期生	3 名
64 期生	1 名
65 期生	1 名
66 期生	4 名
67 期生	1 名
68 期生（現高 3）	1 名
計	14 名

※本一覧における留学は、外国の高校における履修を高校における履修とみなし、単位の取得を認定したもの

※生徒の内訳（中入生 9 名、高入生 5 名）

表 行先別内訳（高校 62 期生以降）

学年	人数
アメリカ	8 名
カナダ	2 名
オーストラリア	1 名
チリ	1 名
ブラジル	1 名
ロシア	1 名
計	14 名



## イ 海外からの留学（64期生以降）

海外からの留学生の受入れは、学年ごとに1～5名程度であり、64期生から69期生までで計12名を受入れている。

表 海外からの留学者数の学年別人数（高校64期生以降）

学年	人数
64期生	1名
65期生	3名
66期生	—
67期生	—
68期生（現高3）	5名
69期生（現高2）	3名
計	12名

表 海外からの留学者数の出身国人数（高校64期生以降）

出身国	人数
ドイツ	2名
スウェーデン	2名
フランス	2名
デンマーク	1名
ブラジル	1名
マレーシア	1名
モンゴル	1名
ラオス	1名
ラトビア	1名
計	12名

## (2) 英検の取得状況・CSEスコア

論点1-1 1(1)イを参照（P23～26）。

## 2 生徒や教職員等の意識

### (1) グローバルへの意識

#### ア 調査結果概要

生徒自身の諸外国への関心は高く、教職員は生徒のグローバルへの意識は高いと考えている。

また、保護者の南高校のグローバル人材育成の取組内容についての評価は高く、高入生の保護者の約64%がとても良いと思っている。

高校卒業後の進学先として約12%の生徒が海外大学を考えている。

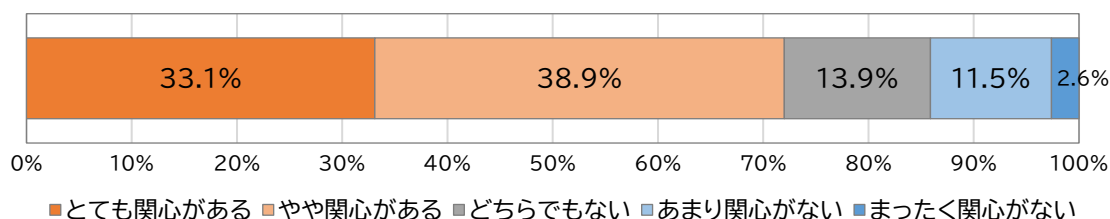
将来、留学したり、仕事で国際的に活躍をしたいと考えている生徒は約半数である。

#### イ アンケート調査結果

- 諸外国の国民性、文化、慣習の違いについて、「とても関心がある」「やや関心がある」生徒は全体で約72%であった。

3. (4) 諸外国の国民性、文化、慣習の違いについて、関心を持っていますか？

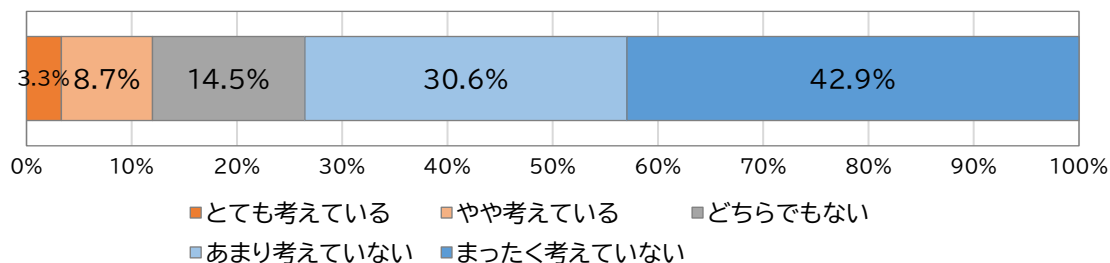
生徒アンケート



- 生徒のうち、高校卒業後の進学先として、海外大学を「とても考えている」「やや考えている」生徒は約12%（101名の回答）であった。

5. (3) あなたは高校卒業後の進学先として、海外大学を考えていますか？

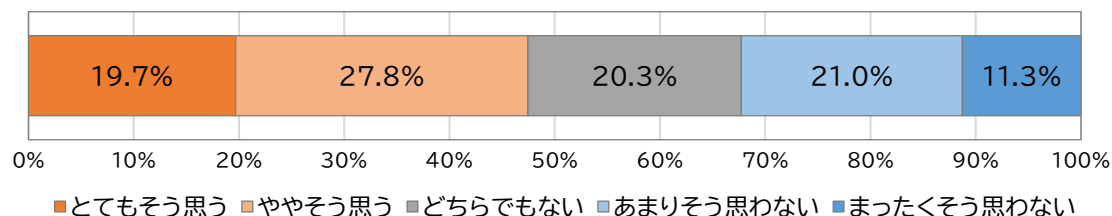
生徒アンケート



- 将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えているかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」生徒は約48%であった。

5. (4) 将来は、留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？

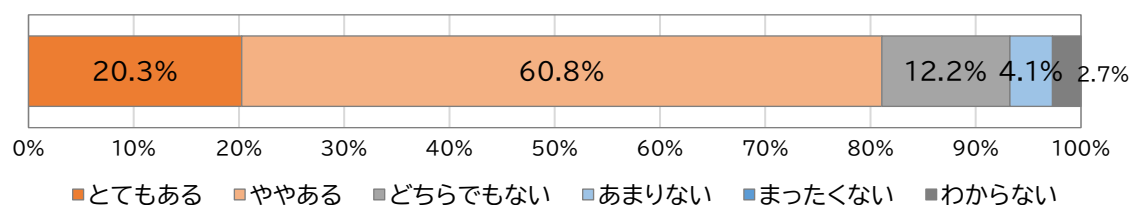
**生徒アンケート**



- 生徒のグローバルな視点が「とてもある」「ややある」と考えている教職員は約81%であった。

2. (4) 南高等学校・附属中学校の生徒は、グローバルな視点があると思いますか？

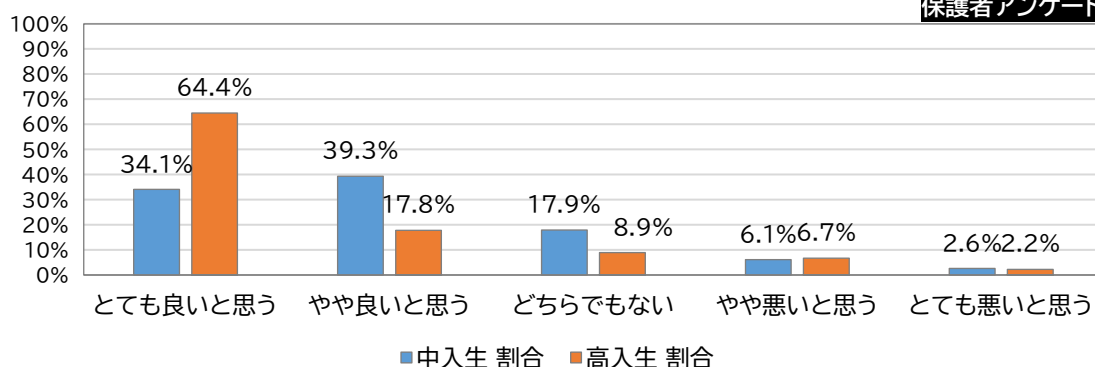
**教職員アンケート**



- グローバル人材育成の取組内容を「とても良いと思う」「やや良いと思う」保護者は約76%であり、特に高入生の保護者の約64%が「とても良いと思う」と回答した。

2. (12) 南高等学校のグローバル人材育成の取組内容について、あなたはどのように思いますか？

**保護者アンケート**



## ウ アンケート自由記述・ヒアリング調査結果

アンケートの自由記述及びヒアリング調査では、「(南高校は) 海外と交流できる仕組みがあり、グローバルな経験をする環境が整っている学校だと感じている。(生徒・高2)」という意見など、グローバルな取組が充実しているといった内容があった。

これらの意見から、中高ともに学校全体として、生徒がグローバルへの意識を持つことを後押しできるような体制が整っていると言える。

また、「海外にゆかりのある知り合いに聞いて、本場で学問を学びたいため、留学ではなく、海外の大学へ進学したいと強く考えている。(生徒・高2)」という意見など、将来的に海外への進学・就職を希望する生徒も一部いた。

また、保護者からは新型コロナウイルス感染症拡大のため一時期実施されていなかった海外研修についての再開を望む意見が複数挙げられた。

### 3 考察

- ・新型コロナウイルス感染症拡大のため、海外研修が近年中断していたが、これまで海外研修（附属中学校でのカナダ研修、高校でのシンガポール研修）やカナダ姉妹校との交流（受入れと訪問）、海外への留学、積極的に留学生を受け入れるなど、直接的な交流に積極的に努めている。また、平成27年度から令和元年度にかけての5年間、スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定されたこと（令和2年度以降は、本市独自の横浜SGH事業として継続実施）で、グローバルな研究課題に取り組むためのカリキュラムが編成されており、グローバルな視点の定着を図り、グローバル教育を積極的に実践していることが伺える。
- ・英検取得状況を見ると、前述のように、直近の実績では南高校附属中学校では準2級以上の取得率が80%以上、南高校では2級以上の取得率が80%以上と高い水準であり、また、本市として英検の受験料の全額助成を始めた当初から比較して、高校、附属中学校ともに上位級への受験者が増加傾向にあることから、グローバル教育の実践に関する取組の一つの成果が伺える。
- ・一方で、アンケート調査結果から、生徒のグローバルへの関心は高いが、海外大学への進学・留学・仕事での国際的活躍を視野に入れている生徒はいずれも半数以下であったことから、外国への関心の高さやグローバルな視点が将来の意向・目標につながっているとは言いがたい。生徒が世界に視野を広げて自身の将来を描いていけるような学校であることが南高校・附属中学校には求められており、もう一步踏み込んだ取組、実践が必要である。

以上のことから、グローバルな視点の定着、グローバル教育の実践状況には、一定の成果が認められるものの、キャリア教育という視点からのアプローチを見直す必要があり、「南高校が目指すグローバルリーダー」の育成について、6年間を通じた教育活動を改めて検討し、生徒が卒業後もグローバルへの意識を持って活躍していけるような支援・取組が求められる。

## 第3 論点2：併設型中高一貫教育校としての取組

### 1 学校の取組の概要

#### (1) 中高一貫教育における教育課程の基準の特例の活用

附属中学校開校当時は、中高一貫教育における教育課程の基準の特例を活用した中入生への学習内容の先取り（以下「先取り学習」という。）を実施しており、高校へ進学してからのクラス編成も高入生とは別に作る体制を取っていた。現在では、先取り学習は行わず、クラスは混合となっている。以下では、これらの経緯や課題・効果を整理した。

#### ア 先取り学習、中入生・高入生別クラスによる編成（附属中学校1期生～3期生）

附属中学校1期生から3期生は、高校2年時まで中入生クラスと高入生クラスを別に編成、高校3年時は混合クラスを編成し、国語、数学、英語において先取り学習を実施していた。

実施していた先取り学習の内容は次のとおりである。

#### ○ 先取り学習の具体的内容

**国語：**中学校3年生で高校の内容の古典（古文・漢文）を学習した。1学期は中学校の古典を学習し、2学期以降、中学校の教員と高校の教員とのチームティーチングによる授業で週1時間、高校の教科書を用いて学習した。内容は高校1年生で学ぶ作品を扱うことや漢文の学習等であった。

**数学：**中学校で、高校の教員による授業で数学Ⅰを週1時間、高校の教科書を用いて学習した。さらに、中入生は数学Ⅱを高校1年生で週1時間学習し、高校2年生では高入生と同じ単位数で学習を行った。

**英語：**中学校で、高校の教員による授業でコミュニケーション英語Ⅰを週2時間、高校の教科書を用いて学習した。さらに、高校1年生でコミュニケーション英語Ⅱを週2時間行い、高校2年生ではコミュニケーション英語Ⅲを週1時間行った。

#### ○ 先取り学習と中入生・高入生別クラスの課題

- ・ 高校3年生で高入生が中入生と同じ学習進度となることを想定していたが、高校3年生で同じクラスで授業を受ける際、授業進度や難易度の調整が難しい状況が生まれた。
- ・ 中入生・高入生別クラスでの学校運営は、生徒指導や学年経営等で学年が一体となって活動していくにあたり、困難な場面が生じた。

- ・附属中学校2期生の学年の高校入試において、1次募集で定員を満たさず2次募集が行われたこと等から、高校から入学することに対する受検生の不安を解消する必要があった。

## イ 学習内容の深掘り、中入生・高入生混合クラスへの転換（附属中学校4期生～）

上記アの課題を解消するため、附属中学校4期生からは、先取り学習、中入生・高入生別クラス編成を廃止し、混合クラスにすることとした。附属中学校の生徒については、中学校の学習内容の深掘りが高校での伸びにつながると考え、教育課程を再構築した。

一部、数学の授業で中学校3年生後半に、高校1年生で学習する内容（平面図形と2次関数）に触れているが、中入生・高入生が混合クラスとなるため、同じ範囲を学び直すこととしている。

### ○ 混合クラスにしたことによる効果

- ・中入生は、高校生とも関わりながら深い学びを継続してきた。高入生は、地域の中学校で様々な経験を積み、南高校を選択し入学してきた。混合クラスにしたことで、中入生と高入生という異なる環境で学んだ生徒同士が、高校で融合し切磋琢磨する環境の中で、お互いを認め尊重し合いながら高め合う環境ができた。
- ・混合クラスとなった平成30年度以降、高校の学校評価の生徒アンケートの数値が全体的としてよい方向への変化が見られた。混合クラスにしたことで、生徒にとって環境がよくなったことが伺える。

### ○ 混合クラスの課題

- ・後述する中入生と高入生の意識調査の結果からは、中入生、高入生ともに学校生活を肯定的に感じているものの、学習への意識について着目すると、高入生は、授業の内容の難易度・進む速さ・量について、やや難しい・速い・多いと感じている生徒がやや多い。また、中入生の生徒及び保護者から先取り学習を望む意見が多数あり、混合クラスにおいて、個別最適な学びを実現していくことの難しさが伺える。

## (2) 附属中学校教員と高校教員の相互乗り入れ授業

附属中学校と高校では、教員が相互の授業を受け持つ、乗り入れ授業が行われている。以下、相互乗り入れ授業について整理した。

### ア 相互乗り入れ授業の概要

高校の教員が附属中学校の授業を担当している時間数（乗り入れをしている授業時間数）を次に示す。

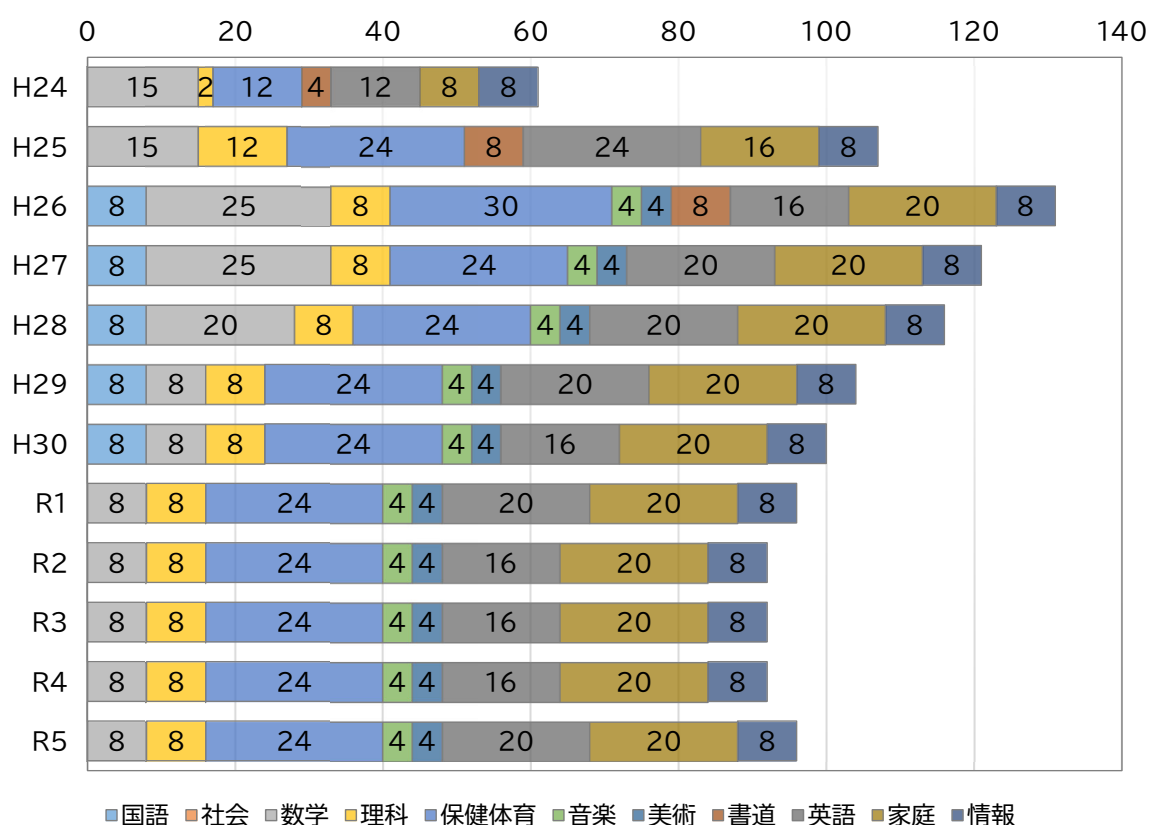


図 高校の教員が附属中学校の授業を担当している時間数（件）



また、令和5年度において高校の教員が附属中学校の授業を担当している時間数、附属中学校教員が高校の授業を担当している単位数を次に示す。

高校では、例年一定数の教員が附属中学校の授業を担当しているが、附属中学校の教員が高校の授業を担当しているのは1教科（英語）であり、単位数も少ない。

表 令和5年度 高校の教員が附属中学校の授業を担当している時間数及び人数

教科	時間数(単位時数)合計とその内訳		担当人数
数学	8	中学校3年 2時間×1人 6時間×1人	2人
理科	8	中学校3年 1時間×2人 2時間×1人 4時間×1人	4人
保健体育	24	中学校1年 6時間×1人 中学校2年 3時間×3人 中学校3年 3時間×3人	6人
音楽	4	中学校3年 4時間×1人	1人
美術	4	中学校3年 4時間×1人	1人
英語	20	中学校1年 1時間×3人 3時間×1人 中学校2年 1時間×2人 2時間×2人 中学校3年 1時間×2人 2時間×1人 4時間×1人	11人
家庭	20	中学校1年 2時間×1人 3時間×2人 中学校2年 2時間×1人 3時間×2人 中学校3年 2時間×2人	3人
技術/情報	8	中学校1年 4時間×2人	2人
合計	96	中学校1年 28時間 中学校2年 23時間 中学校3年 45時間	30人

表 令和5年度 附属中学校の教員が高校の授業を担当している時間数及び人数

教科	時間数(単位時数)合計とその内訳		担当人数
英語	3	高校1年 3時間×1人	1人
合計	3	高校1年 3時間	1人

### (3) 附属中学校教員と高校教員の人事交流

#### ア 人事交流の実績

附属中学校の開校から12年間で、附属中学校から高校へ異動した教員は2名、高校から附属中学校へ異動した教員は1名であった。

校種が変わる異動は、高校での受験指導等の学習指導や生活指導において、必要となるノウハウが異なることにより、教員の心理的負担が大きく、このことがこれまで積極的な交流が行われてこなかった原因と考えられる。

#### イ 人事交流の活性化に向けた取組

教育委員会は、中高一貫教育校内での人事交流により、6年間の連続した特色ある教育活動の充実を図ることを目的として、令和4年度の人事異動から、附属中学校と高校間の異動について、校長の意向が校内人事に準じる形で反映されやすいよう、中高一貫教育校内の人事交流の制度を新設した。

また、令和6年度の人事異動に向けては、異校種も含め市立学校の教員へ広く中高一貫教育校の特色を周知するなど、意欲のある人材の配置に努めている。

#### (4) 主な年間行事予定における中高間の連携状況（令和5年度）

年間行事予定をみると、中高間で連携して実施する行事は、期末テストを除くと、生徒総会、南高祭、合唱コンクールなどが合同で実施されている。

表 学校の年間行事（下線部は中高が合同で実施するもの）

月	行事
4月	入学式（中・高）
5月	生徒総会（ <u>全校</u> ）、中間テスト（高）南高祭：体育祭の部（ <u>全校</u> ）
6月	期末テスト（ <u>全校</u> ）*中…3日間、高…4日間
7月	合唱コンクール（ <u>全校</u> ）、個人面談（中・高）球技大会（高）夏期講習（高） 英語集中研修（中1、中2）
8月	英語宿泊研修2泊3日（中3）
9月	南高祭：舞台の部、展示の部（ <u>全校</u> ）後夜祭の部（高） イングリッシュキャンプ2泊3日（中2）
10月	関西方面研修旅行2泊3日（中3）中間テスト（高）北海道研修旅行3泊4日（高2）
11月	期末テスト（ <u>全校</u> ）*中…3日間、高…4日間
12月	個人面談（中・高）、球技大会（高1、高2）
1月	百人一首大会（中）
2月	期末テスト（ <u>全校</u> ）*中…3日間、高…4日間
3月	卒業式（中・高）、球技大会（高1、高2）

#### (5) 校務分掌について

令和2年度までは附属中学校の校務分掌と高校の校務分掌の組織が別であったが、令和3年度より校務分掌（セクション）は附属中学校と高校と同じ部を組織している。例えば、国際企画部では、総合的な学習・探究の時間についての情報や海外と直接つながる活動の情報の交換を行ったり、教育課程委員会では、例年10月に中高教員が互いに授業を見学し、生徒の実態や目指す生徒の姿などについて研究協議を行ったりするなど、6年間を見通した教育活動となるよう連携が図られている。

しかし、全体として、所属教員数に差があることによって、どの分掌も高校の教員数が多くならざるを得ないことや、附属中学校の人数が少ない影響もあり、分掌の人数に偏りが生じてしまい、連携が図りにくい状況がある。

○ 校務分掌（セクション）の人数（高校教員の人数、附属中学校教員の人数）

総務部（高9、中3）、教務部（高9、中6）、生活部（高9、中4）

生徒会部（高9、中3）、進路学習部（高10、中1）、国際企画部（高9、中6）

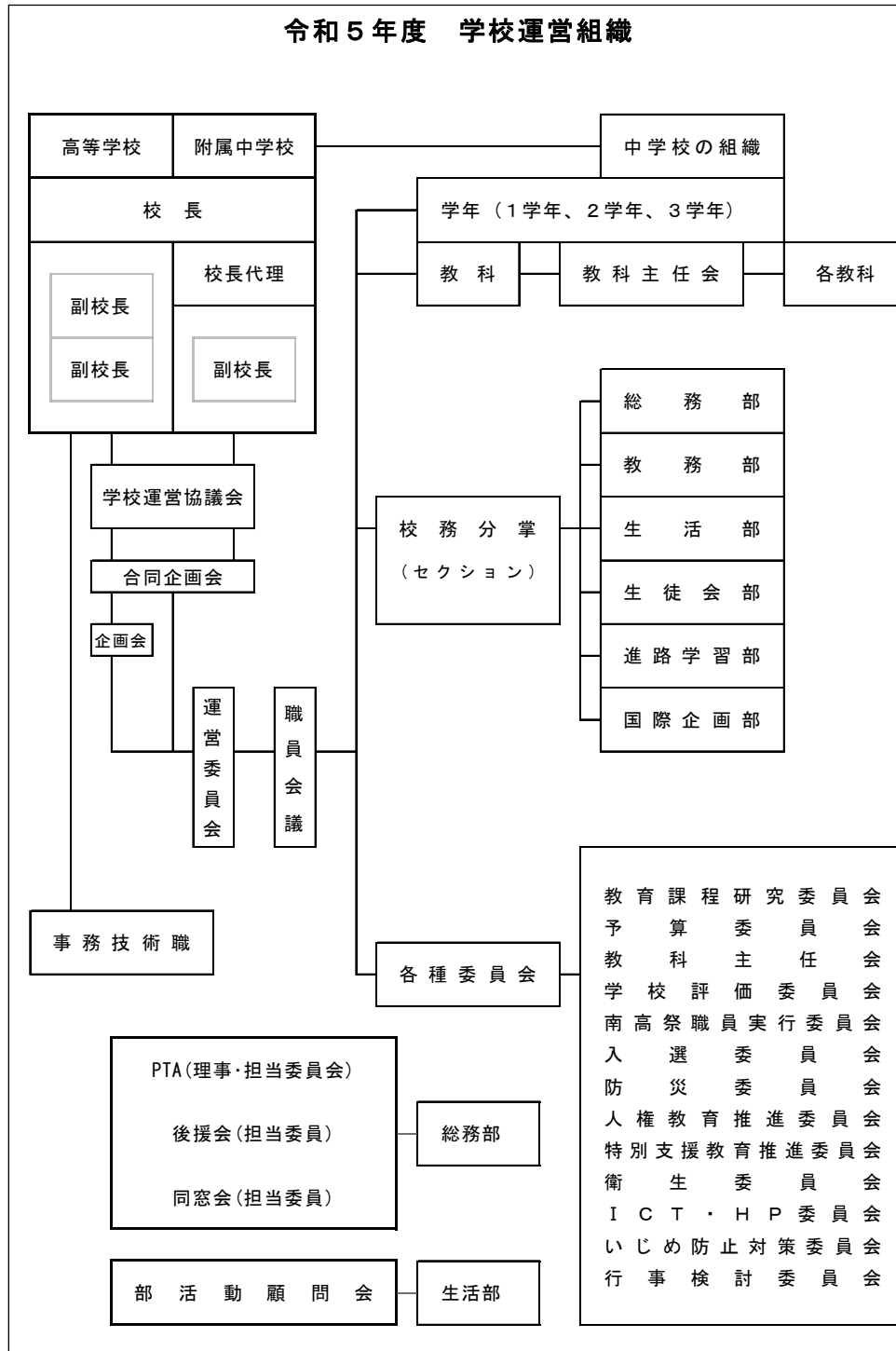


図 南高校 令和5年度 学校運営組織図

## 論点 2 - 1 : 入学時期の違いによる教育的効果について

---

### 1 取組の成果・実績

#### (1) 大学合格実績（再掲）

平成 25 年度～令和 5 年度の大学合格実績を次に示す。

附属中学校の 1 期生が大学入試を受験した平成 30 年度以降、国公立大学合格者数、難関国公立大学合格者数、難関私立大学合格者数はいずれも増加している。特に難関国公立大学については、附属中学校設立前と比較して大幅に増加している。

また、高入生の国公立大学合格者数に着目すると、卒業者数あたりの合格者数が増加傾向にある。

海外大学については、令和 4 年度、5 年度は 0 人であったが、これは新型コロナウイルス感染症の影響があったものと推察される。令和 6 年度以降、海外大学への進学を希望する生徒が増えていくことが期待される。

表 年度別大学合格者の推移（人）

年度	高校	附属中	卒業時 学級数	国公立 合格者数		難関国公立 大学 合格者数		東京大学		一橋大学		東京工業 大学		京都大学		医学部 医学科 (国公)		難関私立 大学 合格者数		早稲田 大学		慶應義塾 大学		上智大学		海外大学 合格者数	
平成25年度	57期生		8学級	19	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	22	(0)	13	(0)	2	(0)	7	(0)	0	(0)
平成26年度	58期生		8学級	22	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	17	(0)	15	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
平成27年度	59期生		5学級	23	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	26	(0)	14	(0)	5	(0)	7	(0)	0	(0)
平成28年度	60期生		5学級	14	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	19	(0)	9	(0)	4	(0)	6	(0)	0	(0)
平成29年度	61期生		5学級	18	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	23	(0)	14	(0)	6	(0)	3	(0)	0	(0)
平成30年度	62期生	1期生	5学級	62	(3)	12	(0)	5	(0)	1	(0)	5	(0)	0	(0)	1	(0)	56	(0)	25	(0)	12	(0)	19	(0)	4	(0)
平成31年度	63期生	2期生	5学級	73	(3)	15	(0)	8	(0)	1	(0)	2	(0)	1	(0)	3	(0)	80	(0)	50	(0)	21	(0)	9	(0)	3	(1)
令和2年度	64期生	3期生	5学級	78	(5)	19	(0)	7	(0)	3	(0)	7	(0)	0	(0)	2	(0)	87	(1)	48	(1)	24	(0)	15	(0)	8	(0)
令和3年度	65期生	4期生	5学級	82	(4)	18	(0)	1	(0)	5	(0)	2	(0)	3	(0)	7	(0)	105	(6)	61	(3)	30	(3)	14	(0)	3	(0)
令和4年度	66期生	5期生	5学級	79	(2)	19	(0)	6	(0)	7	(0)	2	(0)	0	(0)	4	(0)	111	(0)	58	(0)	29	(0)	24	(0)	0	(0)
令和5年度	67期生	6期生	5学級	73	(7)	27	(1)	12	(0)	7	(0)	3	(1)	1	(0)	4	(0)	135	(4)	59	(3)	43	(1)	33	(0)	0	(0)

※ 合格者数には、既卒生を含む。「高校」、「附属中」、「卒業時学級数」は現役生について記載したもの。

※ ( ) 内の数字は高入生（内数）

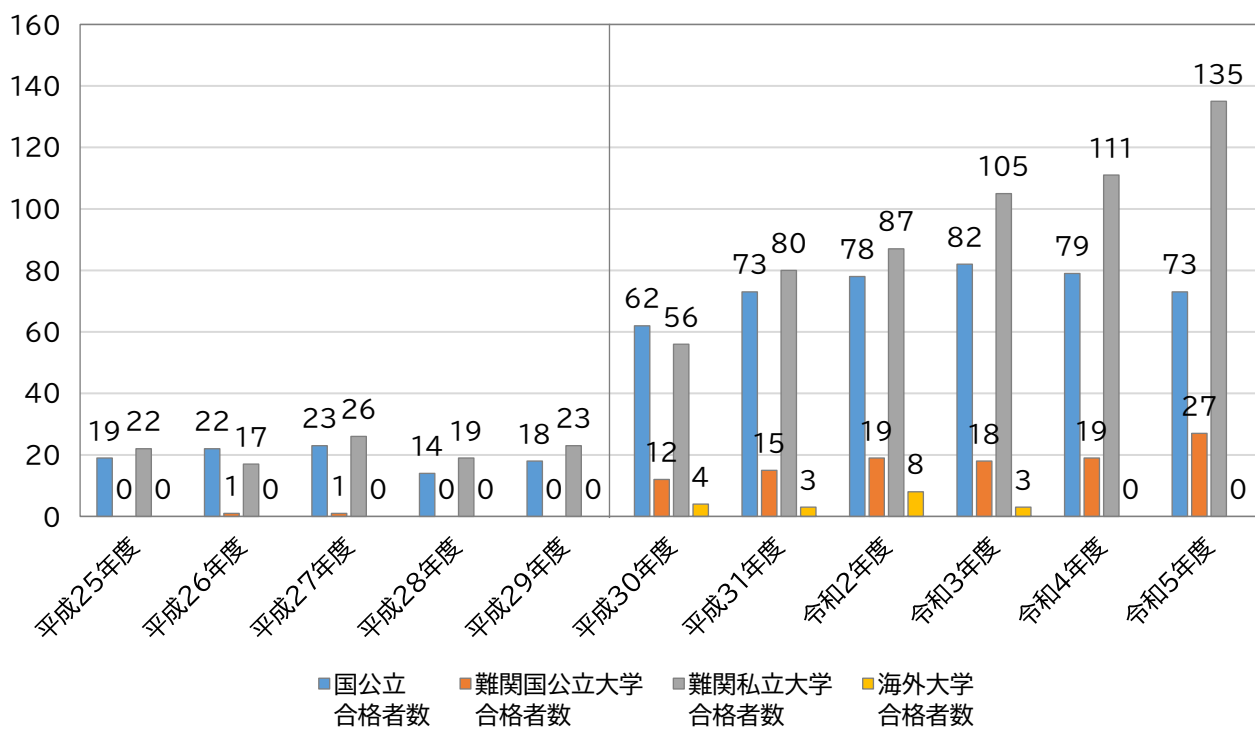


図 年度別大学群別合格者数（人）

## 2 生徒や教職員等の意識

### (1) 学校生活・友人関係に関する意識の違い

#### ア 調査結果概要

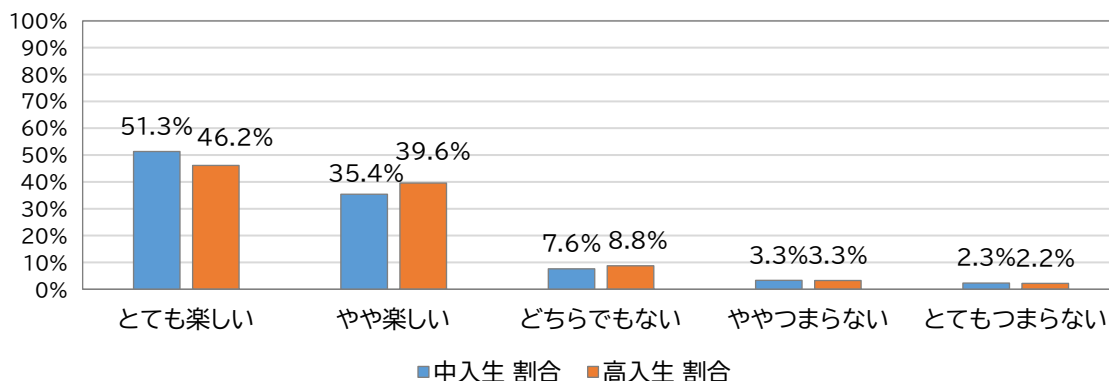
項目によって中入生、高入生で意識の差があるものも見られたが、生徒全体を通して学校生活の充実度は高い。

#### イ アンケート調査結果

- 学校に通うことが「とても楽しい」「やや楽しい」と思う生徒は、中入生が約 87%、高入生が約 86%であり、そのうち「とても楽しい」と思う生徒は、中入生が約 51%、高入生が約 46%であった。

##### 2. (1)学校に通うことについてどう思いますか？

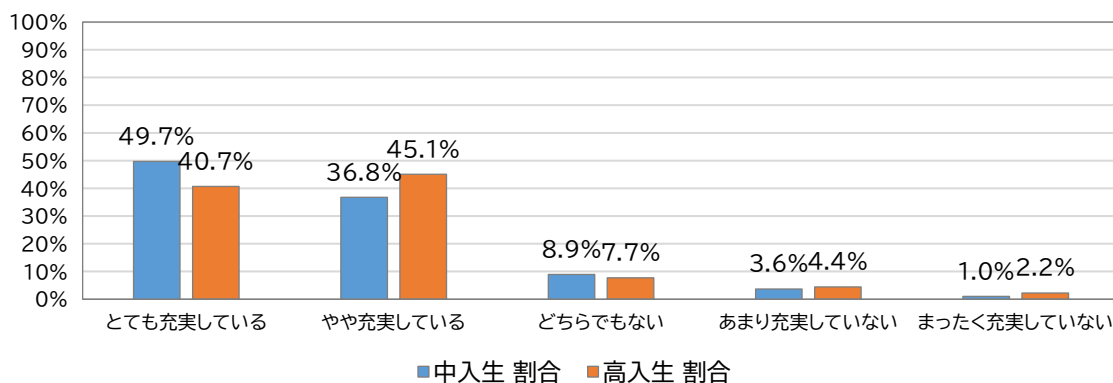
生徒アンケート



- 学校生活が「とても充実している」「やや充実している」と思う生徒は、中入生が約 87%、高入生が約 86%であり、そのうち「とても充実している」と思う生徒は、中入生が約 50%、高入生が約 41%であった。

##### 2. (6)あなたの学校生活の充実度を教えてください。

生徒アンケート

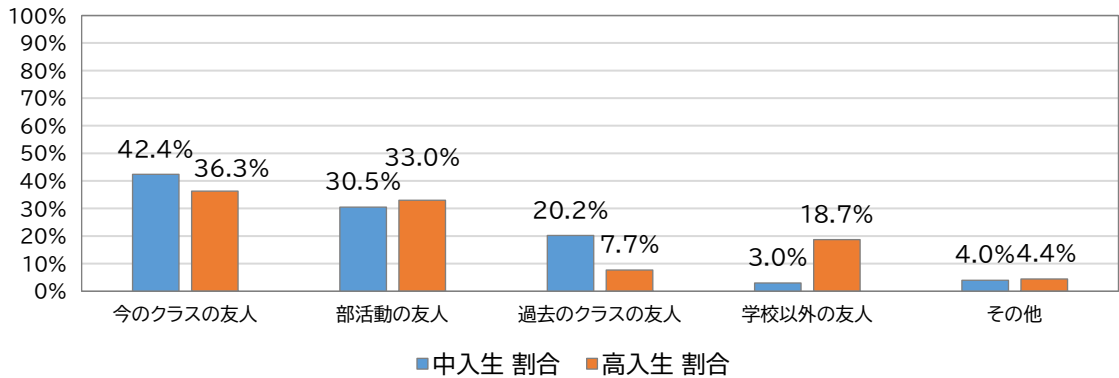




- 仲の良いコミュニティは「今のクラスの友人」と答えた生徒は中入生が約 42%、高入生が約 36%であった。
- 「学校以外の友人」と答えた生徒は、中入生が約 3%であるのに対し、高入生は約 19%であった。

4. (1)あなたの仲が良いコミュニティはどれですか？

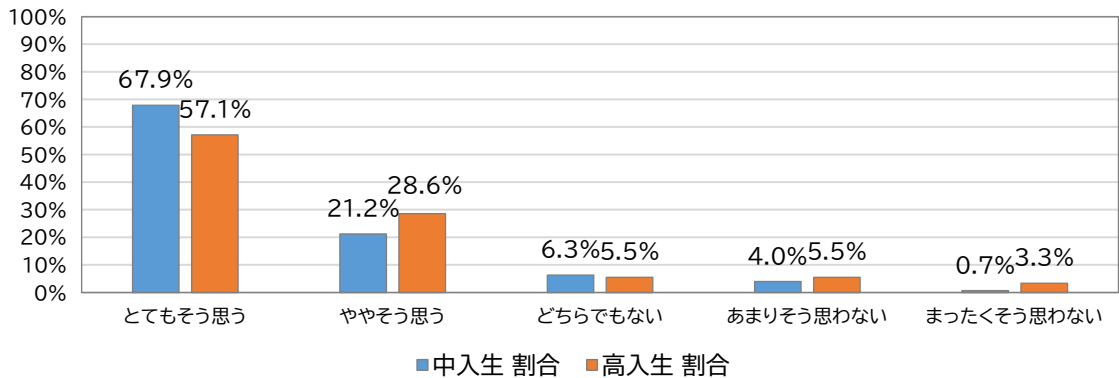
生徒アンケート



- お互いに信頼できる友人ができたかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた生徒は、中入生が約 89%、高入生は約 86%であり、そのうち「とてもそう思う」と答えた生徒は、中入生が約 68%、高入生は約 57%であった。

a) お互いに信頼できる友人ができた。

生徒アンケート



## ウ アンケート自由記述・ヒアリング調査結果

アンケートの自由記述及びヒアリング調査では、「仲良くなるという点では、高校からの入学でも差がないと感じている。(生徒・高2・高入生)」「子どもを中学から通わせてみて、伝統はきちんと引き継がれているかなと感じています。(保護者・高3・中入生)」「自身とは異なる環境で中学時代を過ごした高入生との関わりが自分に良い影響を与えてくれることも多くありました。様々な中学校から集まった仲間と高校3年間過ごせたことに感謝しています。(同窓会)」「高入生がいることに関して、中入生が刺激を受けて相乗効果になっていると思う。(後援会)」といった肯定的な意見が挙げられた。一方、「中・高の合同イベントの際に中入生しか分からないことがあり、相手が高入生かどうか知っておく必要がある場合もある。(生徒・高2・中入生)」「初めから中入生が仲良く話していると焦ります。(生徒・高1・高入生)」「高入生と中入生がなかなかなじみにくいと感じました。(保護者・高3・中入生)」「中高一貫校ではあるが、高校から入学した生徒や親への配慮はもっとあったほうが良い。(保護者・高1・高入生)」といった意見も中入生側・高入生側両方から挙げられていた。

## (2) 授業・学習に関する意識の違い

### ア 調査結果概要

授業の内容への興味は全体的に高い傾向にある。

授業の内容の難易度・進む速さ・量は、どちらでもないと感じている生徒が多いが、授業が難しい・速い・多いと感じている生徒は高入生が多い。

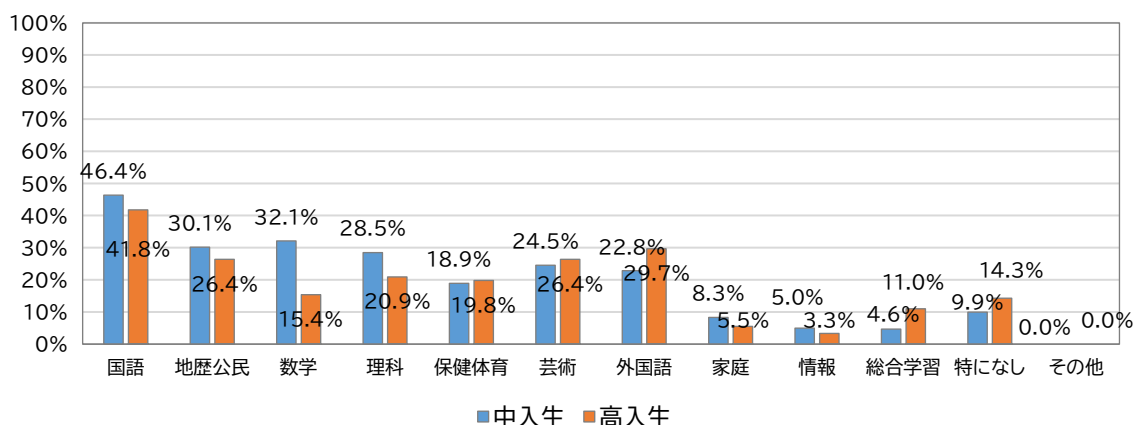
中入生、高入生ともに自ら進んで学ぼうとしている生徒は多いが、「常にそうしている」生徒は中入生が多い。

### イ アンケート調査結果

- 数学が「得意」と答えた生徒は、中入生が約 32%、高入生が約 15%であった。
- 理科が「得意」と答えた生徒は、中入生が約 29%、高入生が約 21%であった。

3. (1)得意な教科等は何ですか？(高校生)

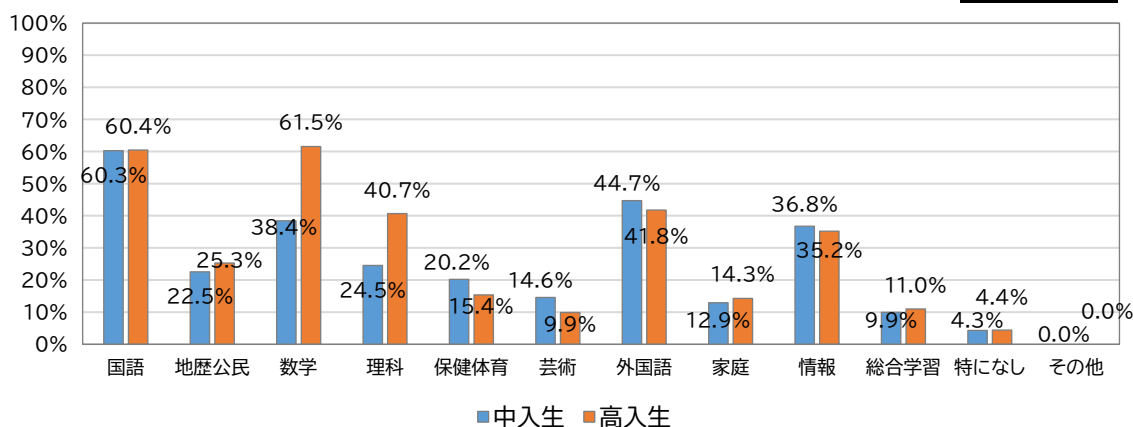
生徒アンケート



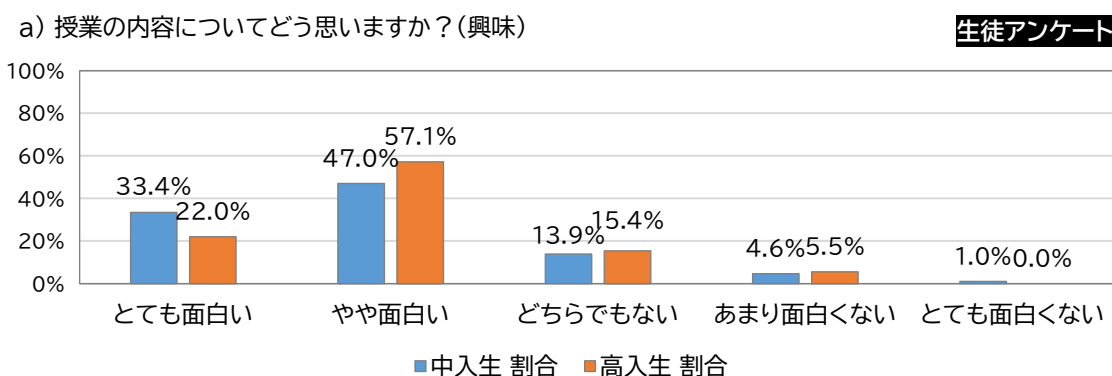
- 数学が「苦手」と答えた生徒は、中入生が約 38%、高入生が約 62%であった。
- 理科が「苦手」と答えた生徒は、中入生が約 25%、高入生が約 41%であった。

3. (2)苦手な教科等は何ですか？(高校生)

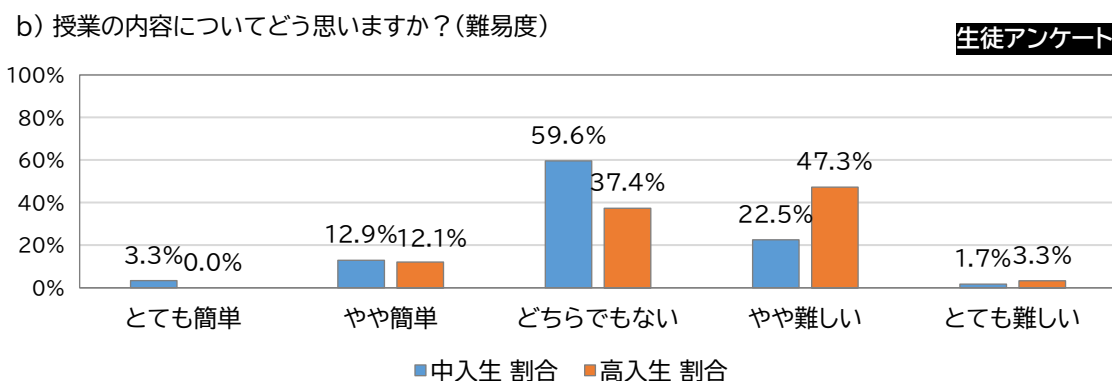
生徒アンケート



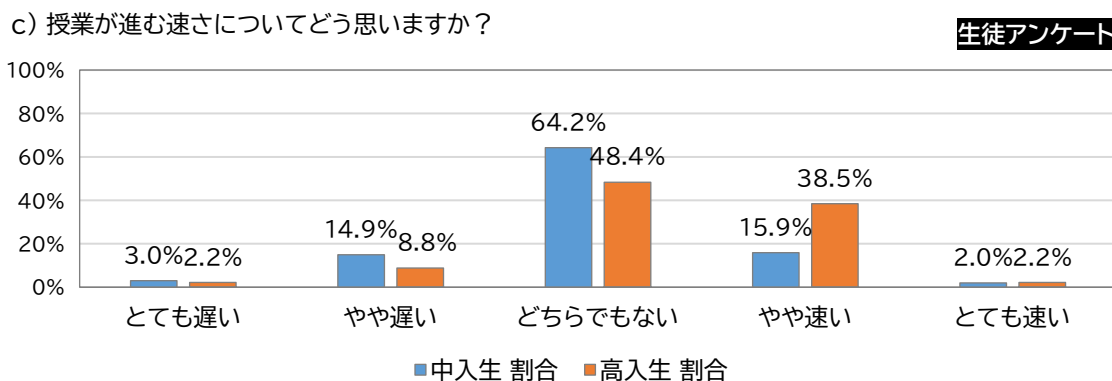
- 授業の内容が「とても面白い」「やや面白い」と答えた生徒は、中入生が約 80%、高入生が約 79%であり、そのうち「とても面白い」と答えた生徒は、中入生が約 33%、高入生が約 22%であった。



- 授業の内容が「とても難しい」「やや難しい」と答えた生徒は、中入生が約 24%、高入生が約 51%であり、そのうち「やや難しい」と答えた生徒は、中入生が約 23%、高入生が約 47%であった。



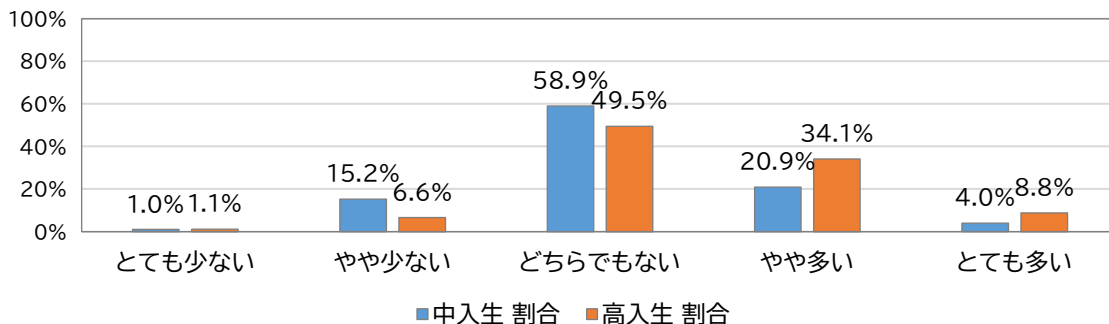
- 授業が進む速さが「とても速い」「やや速い」と答えた生徒は、中入生が約 18%、高入生が約 41%であり、そのうち「やや速い」と答えた生徒は、中入生が約 16%、高入生が約 39%であった。



- 授業で学ぶ量が「とても多い」「やや多い」と答えた生徒は、中入生が約 25%、高入生が約 43%であり、そのうち「やや多い」と答えた生徒は、中入生が約 21%、高入生が約 34%であった。

d) 授業で学ぶ量についてどう思いますか？

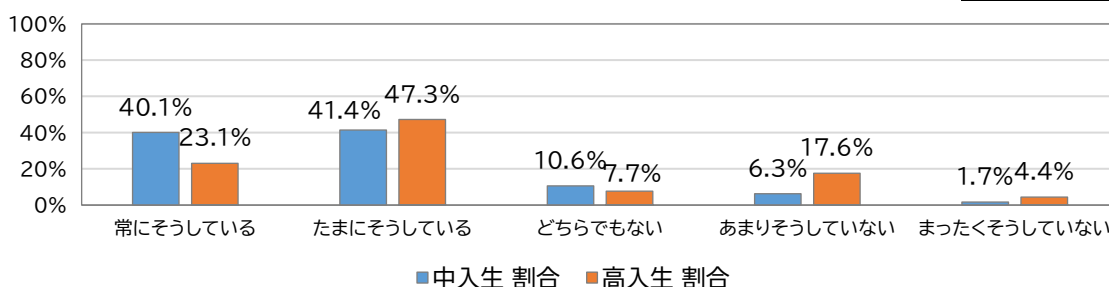
生徒アンケート



- 自ら進んで学ぼうと「常にそうしている」「たまにそうしている」生徒は、中入生が約 82%、高入生が約 70%であり、そのうち「常にそうしている」生徒は、中入生が約 40%、高入生が約 23%であった。
- 「あまりそうしていない」生徒は、中入生が約 6%、高入生が約 18%であった。

f) あなたは日頃から、自ら進んで学ぼうとしていますか？

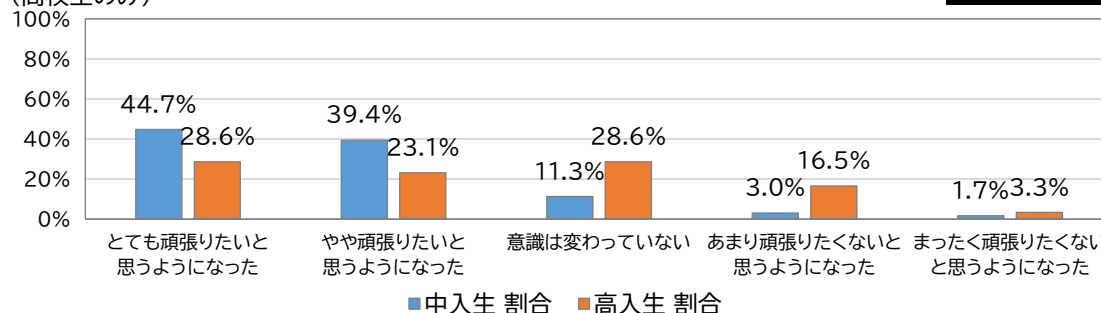
生徒アンケート



- 中学校のころと比べて学習を「とても頑張りたいと思うようになった」「やや頑張りたいと思うようになった」生徒は、中入生が約 84%、高入生が約 52%であり、そのうち「とても頑張りたいと思うようになった」生徒は、中入生が約 45%、高入生が約 29%であった。

h) あなたは中学生のころと比べて、学習を頑張ろうという意識はどう変わりましたか？  
(高校生のみ)

生徒アンケート



## ウ アンケート自由記述・ヒアリング調査結果

アンケートの自由記述及びヒアリング調査では、「普通の高校と同じ進度で授業してしまうのはもったいないと感じた。(生徒・高3・中入生)」という先取り学習を望む意見があった(生徒・保護者から約80件)。一方で高入生からは、「授業は他の学校と同様に一からスタートしており、春休みから予習が出されていたので、勉強の差は感じなかった。(生徒・高2・高入生)」「高入生を入れるメリットが分かりにくい。附属中学校で学んだことが前提の授業もあり、高入生が置いてきぼりにされることがままあるようだ。(保護者・高1・高入生)」という意見もあった。

授業の進度について、「授業の進みが速く、課題や振り返りなどが多すぎる。(生徒・中1)」「数学は予習していないと授業についていけないのがつらいです。(生徒・高2・高入生)」という声があった。

### (3) 将来に関する意識の違い

#### ア 調査結果概要

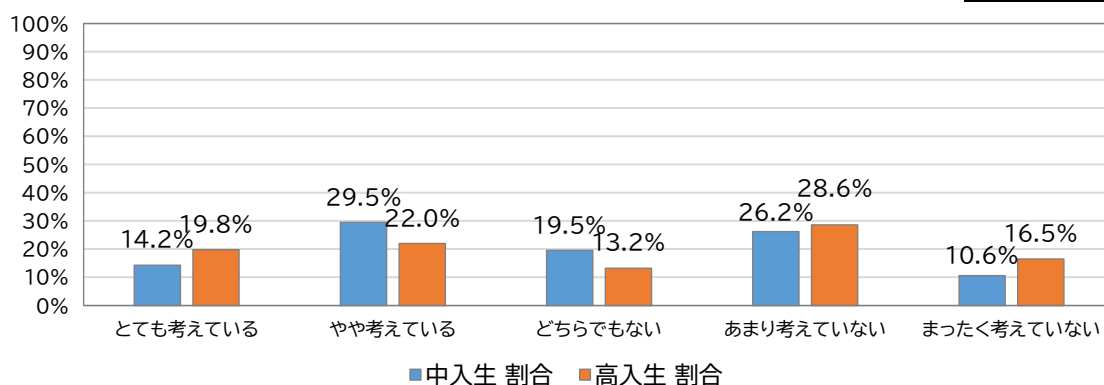
進学先として国際化に重点を置く大学に進むことを考えている生徒は中入生と高入生に大きな差はない。

将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えている生徒は、中入生と比較して高入生のほうが、やや多い。

#### イ アンケート調査結果

- 国際化に重点を置く大学への進学を「とても考えている」「やや考えている」と答えた生徒は、中入生が約 44%、高入生が約 42%であり、そのうち「とても考えている」と答えた生徒は、中入生が約 14%、高入生が約 20%であった。

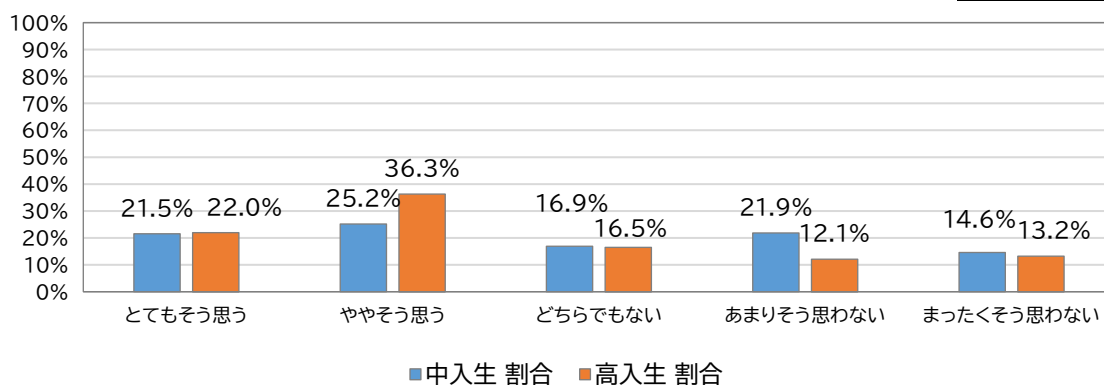
5. (2)あなたは高校卒業後の進学先として、国際化に重点を置く大学を考えていますか？ **生徒アンケート**



- 将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したいかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた生徒は、中入生が約 47%、高入生が約 58%であり、そのうち、「とてもそう思う」と答えた生徒は、中入生が約 22%、高入生が約 22%であった。

5. (4)将来は、留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えていますか？

**生徒アンケート**



### 3 考察

- ・附属中学校の1期生が大学入試を受験した平成30年度以降、国公立大学合格者数、難関国公立大学合格者数、難関私立大学合格者数はいずれも増加しており、附属中学校の設立以降、大学合格実績は大きく向上している。高入生の国公立大学合格者数に着目すると、卒業者数あたりの合格者数は附属中学校設立前より、若干の増加傾向にあり、基礎学力をバランスよく身に付けることに力を入れた教育活動を行ってきた成果が見られる。
- ・アンケート調査結果から、学校生活に関して中入生と高入生を比較すると、学校が楽しい、学校生活が充実しているという項目についてはともにおおむね「楽しい」、「充実している」と答えている。
- ・授業の内容については中入生・高入生ともに面白いと感じている生徒が多いが、授業の難易度、進む速さ、学ぶ量に関する項目の比較では、内容が難しい、進度が速い、学ぶ量が多いという回答は高入生が多い。また、授業の難易度では高入生の約半数が難しいと答えている。こうした状況は、計画的な学習支援をきめ細かく実施しても生じていることから、対策を検討する必要がある。
- ・将来に関する意識では、進学先として国際化に重点を置く大学に進むことを考えている生徒の割合は、中入生・高入生ともに約40%であるが、「とても考えている」生徒の割合は、中入生が約14%、高入生が約20%で、中入生が高入生よりも低い。また、将来、留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えている生徒の割合も、中入生が約47%、高入生が約58%で、中入生の方が低く、国際社会で活躍できるグローバル人材の育成を掲げている中高一貫教育校としては、十分な結果であるとは言いがたい。



## 論点 2 - 2 : 併設型中高一貫教育校としての運営状況について

### 1 取組の成果・実績

南高校附属中学校では、平成 23 年度から適性検査に基づく入学者選抜を実施し、160 名を募集している。また、南高校においては平成 26 年度実施（平成 27 年度入学）入学者選抜から募集定員を 38 名（1 クラス分）としている。

#### (1) 附属中学校の適性検査競争率の推移

附属中学校開校当初、1 期生、2 期生は 10 倍前後の競争率であり、その後 3 年間は 7 倍以上の競争率であった。平成 29 年度以降はおおむね 5 倍前後の競争率で推移している。

#### (2) 高校の入学者選抜競争率の推移

神奈川県公立高校入学者選抜の改革のあった平成 24 年度以降、神奈川県公立高校全体の競争率は 1.17 倍～1.21 倍で推移している。1 クラス募集 2 年目の平成 27 年度実施（平成 28 年度入学）入学者選抜では応募が定員を満たさず、二次募集を行った。その後、教育課程やクラス編成を見直し、平成 30 年度以降に実施した入学者選抜では県内全体の競争率を上回っている。

表 附属中学校の適性検査競争率と高校の入学者選抜競争率の推移

年 度	附属中			高校			備 考
	期	募集定員	競争率	期	募集定員	競争率	
平成22年度実施 平成23年度入学		—	—	58期生	317	前期 1.86 後期 1.24	
平成23年度実施 平成24年度入学	1期生	160	10.60	59期生	197	前期 2.37 後期 1.35	附属中学校開校 高校5クラス募集開始
平成24年度実施 平成25年度入学	2期生	160	9.50	60期生	198	1.26	
平成25年度実施 平成26年度入学	3期生	160	7.91	61期生	198	1.15	
平成26年度実施 平成27年度入学	4期生	160	7.81	62期生	38	1.18	高校1クラス募集開始
平成27年度実施 平成28年度入学	5期生	160	7.62	63期生	38	共通 1.00 二次 1.36	共通選抜募集38名、27名受検 共通選抜二次募集11名、15名受検
平成28年度実施 平成29年度入学	6期生	160	6.16	64期生	38	1.26	
平成29年度実施 平成30年度入学	7期生	160	5.16	65期生	38	1.08	
平成30年度実施 平成31年度入学	8期生	160	4.88	66期生	38	1.45	
令和元年度実施 令和2年度入学	9期生	160	4.93	67期生	38	1.79	
令和2年度実施 令和3年度入学	10期生	160	5.56	68期生	38	1.26	
令和3年度実施 令和4年度入学	11期生	160	5.15	69期生	38	1.47	
令和4年度実施 令和5年度入学	12期生	160	5.23	70期生	38	1.29	
令和5年度実施 令和6年度入学	13期生	160	4.17	71期生	38	1.42	

→ 附属中 1 期生は、高校では 62 期生

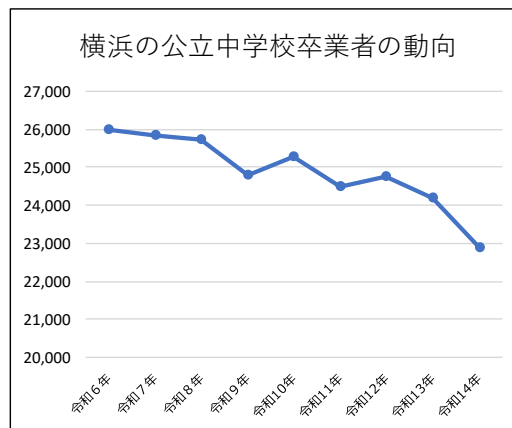
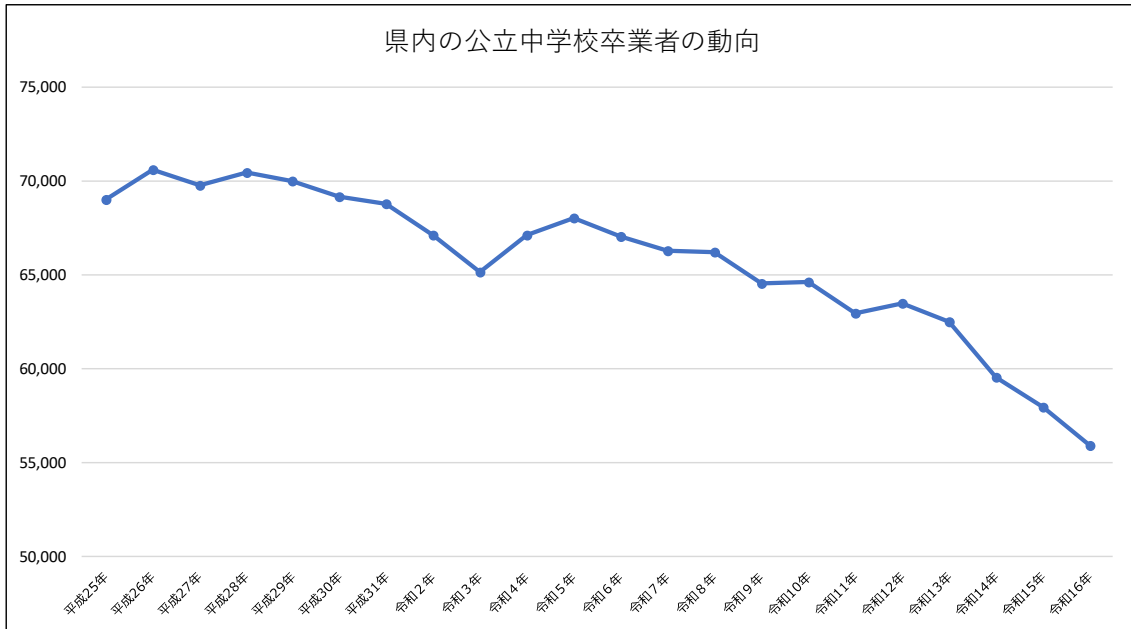
【参考】

県内の公立中学校卒業者の動向<sup>※10</sup>

卒業年月	平成25年 3月	平成26年 3月	平成27年 3月	平成28年 3月	平成29年 3月	平成30年 3月	平成31年 3月	令和2年 3月	令和3年 3月	令和4年 3月	令和5年 3月	
公立中学校 卒業者（県内）	68,969	70,571	69,744	70,397	69,996	69,140	68,742	67,115	65,159	67,124	68,002	
対前年増減		1,113	1,602	△ 827	653	△ 401	△ 856	△ 398	△ 1,627	△ 1,956	1,965	878

卒業年月	令和6年 3月	令和7年 3月	令和8年 3月	令和9年 3月	令和10年 3月	令和11年 3月	令和12年 3月	令和13年 3月	令和14年 3月	令和15年 3月	令和16年 3月
公立中学校 卒業者（県内）	67,003	66,281	66,189	64,556	64,569	62,950	63,451	62,510	59,546	57,932	55,899
対前年増減	△ 999	△ 722	△ 92	△ 1,633	13	△ 1,619	501	△ 941	△ 2,964	△ 1,614	△ 2,033
公立中学校 卒業者（横浜市）	26,007	25,825	25,745	24,799	25,264	24,487	24,768	24,175	22,898		
対前年増減	△ 290	△ 182	△ 80	△ 946	465	△ 777	281	△ 593	△ 1,277		

※令和6年3月以降は推計値



※10 県内の公立中学校の動向は、神奈川県ホームページ掲載資料から作成。  
(<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/dc4/nyusen/koushikyou/r5singikekka2.html>)

## 2 生徒や教職員等の意識

### (1) カリキュラム編成について

#### ア 調査結果概要

6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラムが編成されているか、体系的な学習指導、キャリア教育が実施されているかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた教職員は、いずれの項目でも約半数であり、「とてもそう思う」と答えた教職員は1割程度であった。

一定数の生徒・保護者が、学校のカリキュラムの改善点として、先取り学習を希望している。

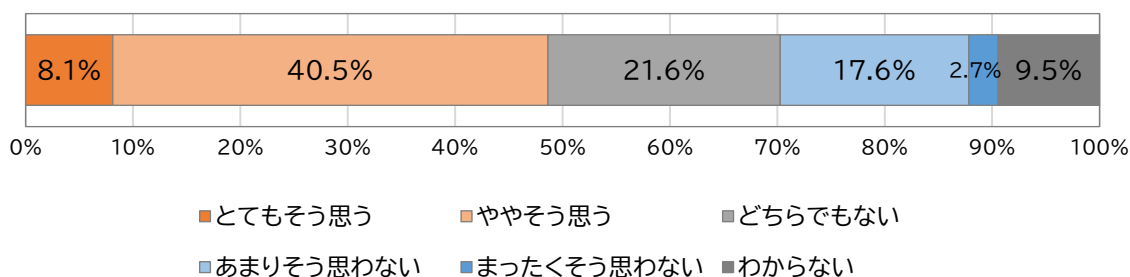
英語のラウンド制<sup>※11</sup>について、生徒アンケートの自由記述において賛否両方の意見が多く挙げられている。中学生からの支持意見が多く挙げた一方で、高校生からは、「中学から文法を教えてほしい」という意見が多く挙げられている。

#### イ アンケート調査結果

- 6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラムが編成されているかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた教職員は約49%であり、そのうち、「とてもそう思う」と答えた教職員は約8%であった。

3. (1)南高等学校・附属中学校では、中高一貫教育校としての6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラムが編成されていると思いますか？

教職員アンケート



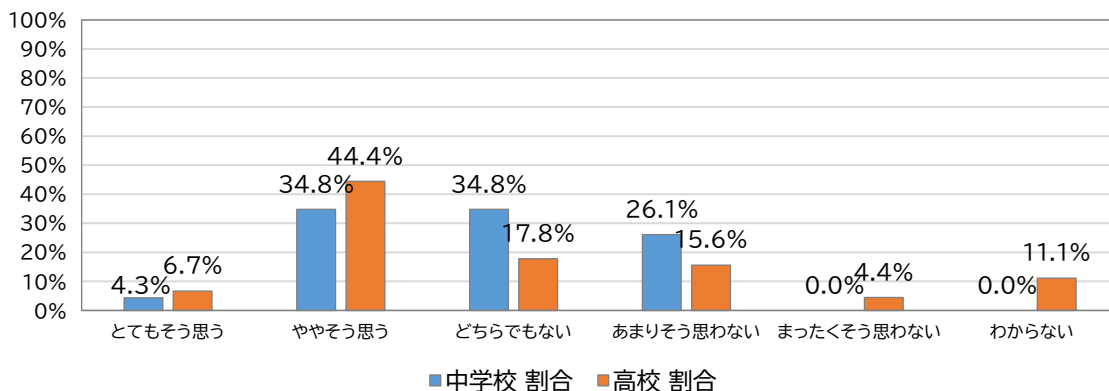
※11 ラウンド制

年間に教科書等を複数回反復使用し、「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランスよく学ぶことで、一人ひとりに合った外国語の表現ができることを目指す指導法。南高校附属中学校では、開校時から教科書を4、5回繰り返すラウンド制の授業に取り組んでいる。

- 中学校・高校別に見ると、6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラムが編成されていると思う教職員の割合は、高校の教職員より中学校の教職員の方が低かった。

3. (1)南高等学校・附属中学校では、中高一貫教育校としての6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラムが編成されていると思いますか？

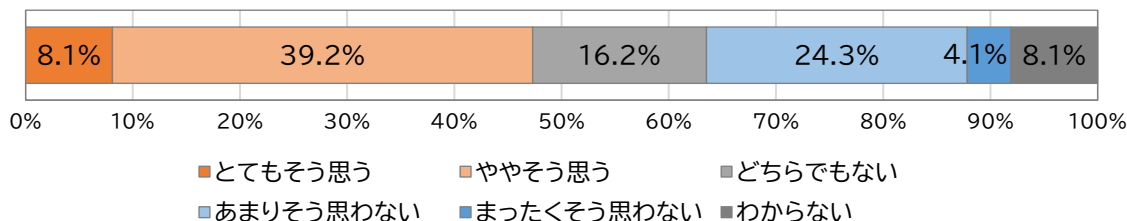
教職員アンケート



- 6年間を見通した体系的な学習指導が実施されているかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた教職員は約 47%であり、そのうち、「とてもそう思う」と答えた教職員は約 8%であった。

3. (2)南高等学校・附属中学校では、中高一貫教育校としての6年間を見通した体系的な学習指導が実施されていると思いますか？

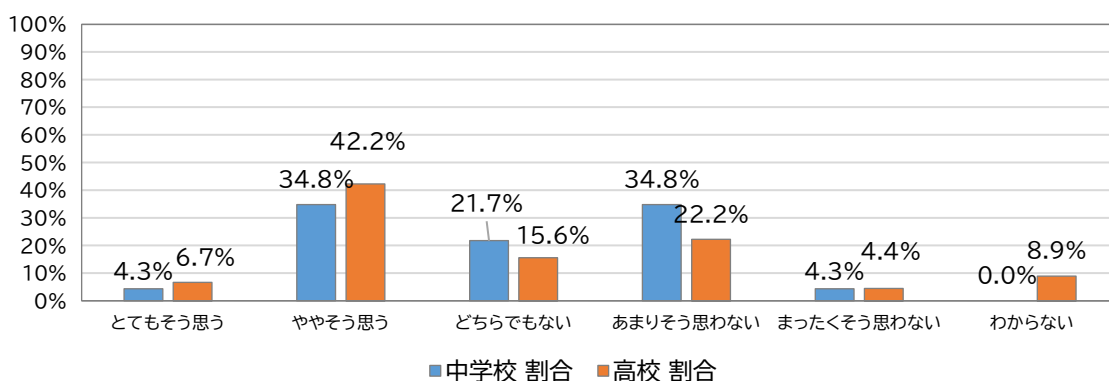
教職員アンケート



- 中学校・高校別に見ると、6年間を見通した体系的な学習指導が実施されていると思う教職員の割合は、高校の教職員より中学校の教職員の方が低かった。

3. (2)南高等学校・附属中学校では、中高一貫教育校としての6年間を見通した体系的な学習指導が実施されていると思いますか？

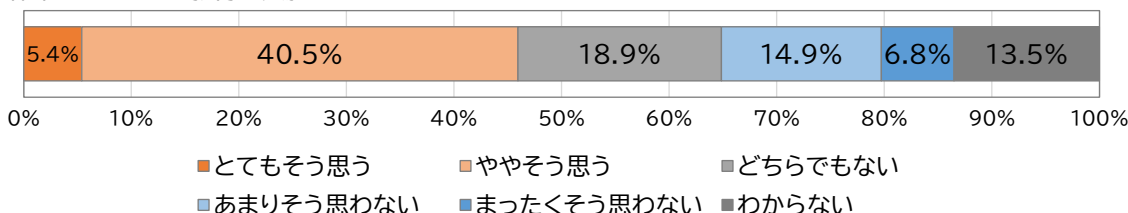
教職員アンケート



- 6年間を見通した体系的なキャリア教育が実施されているかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた教職員は約46%であり、そのうち「とてもそう思う」と答えた教職員は約5%であった。

3. (4)南高等学校・附属中学校では、中高一貫教育校としての6年間を見通した体系的なキャリア教育が実施されていると思いますか？

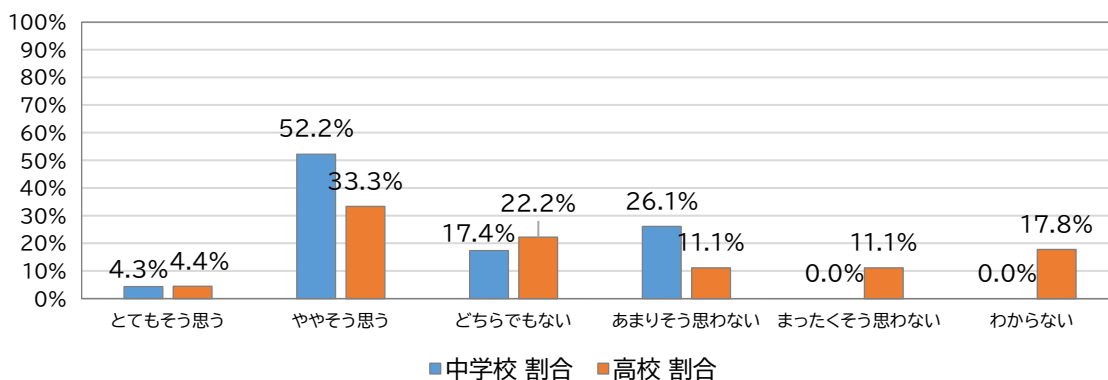
教職員アンケート



- 中学校・高校別に見ると、6年間を見通した体系的なキャリア教育が実施されていると「とてもそう思う」教職員の割合は、中学校と高校とでほぼ同率、「ややそう思う」教職員の割合は、中学校の教職員より高校の教職員の方が低かった。

3. (4)南高等学校・附属中学校では、中高一貫教育校としての6年間を見通した体系的なキャリア教育が実施されていると思いますか？

教職員アンケート



## ウ アンケート自由記述・ヒアリング調査結果

アンケートの自由記述及びヒアリング調査では、「中学受検をして入ったが先取り学習がなく、高校の学習ペースも最低ラインに合わせてある感じがする。(生徒・高1)」「進みが遅く、大学受験には不利。受験期に入る頃に『先取りはしない』と変更されたのは誤算だった。(保護者・高3)」などといった、先取り学習を望む声が生徒・保護者から複数挙がっている。

また、教職員からは「体系的な教科教育のために日頃からのコミュニケーションがよりとれると軌道修正もしやすい。中高合同の教科研修も継続しつつも、本当は日々の学習指導により一貫性を持たせられるよう工夫するべきではないか。(教職員・高校)」という声があった。

さらに英語のラウンド制に関しては、「英語のラウンド制は英語での会話が身につく、とても良いものだと思う。(生徒・中2)」「附属中学校の英語の5ラウンド制は変えた方がいいと思う。高校入学後の模擬試験などに大きな支障が出ていると感じる。(生徒・高3)」という賛否両方の意見が挙がっていた。

## (2) 特別活動（行事等）について

### ア 調査結果概要

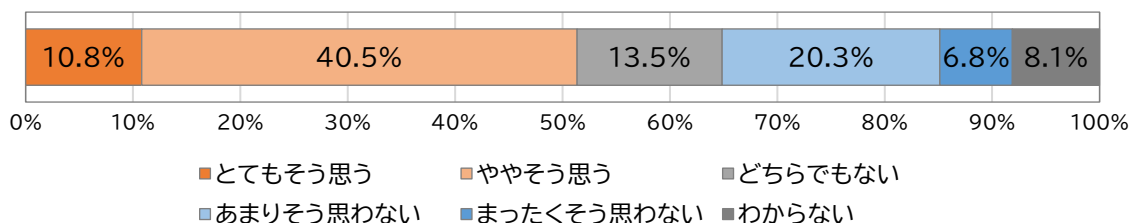
6年間を見通した体系的な特別活動が実施されているかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」教職員は、約51%であり、「とてもそう思う」教職員は、約11%程度であった。

### イ アンケート調査結果

- 中高一貫校としての6年間を見通した体系的な特別活動が実施されているかについて、「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた教職員は、約51%であった。

3. (3)南高等学校・附属中学校では、中高一貫教育校としての6年間を見通した体系的な特別活動が実施されていると思いますか？

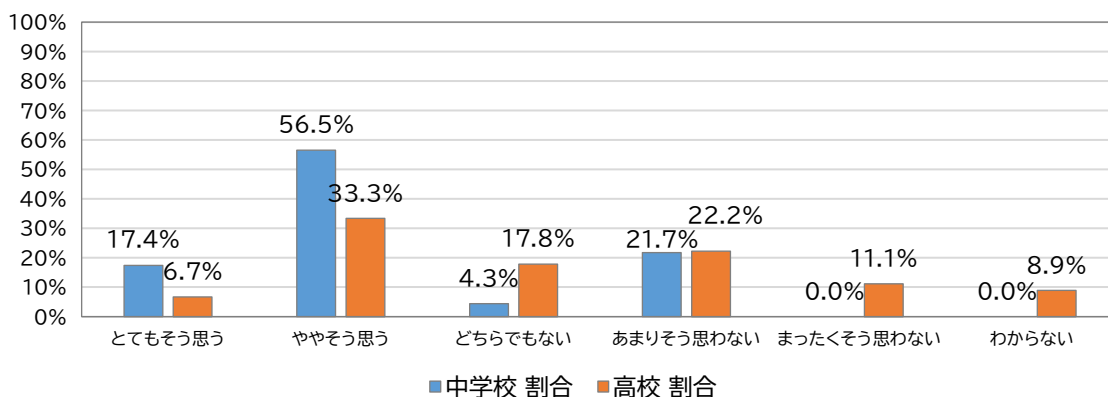
教職員アンケート



- 中学校・高校別にみると、中学校の教職員の方が「とてもそう思う」「ややそう思う」と答えた割合が高校の教職員よりも高かった。

3. (3)南高等学校・附属中学校では、中高一貫教育校としての6年間を見通した体系的な特別活動が実施されていると思いますか？

教職員アンケート



### ウ アンケート自由記述・ヒアリング調査結果

アンケートの自由記述及びヒアリング調査では、「(良い点として) 合同運動会や合同合唱コンクールや合同学園祭などの高校生と中学生の交流・連携がある学校行事(保護者・中1)」「高校ではあまり中学との関わりやメリットが感じられないため、せっかくの中高一貫を生かせるようにしてほしい。(保護者・高1)」という意見があった。

### (3) 中高の連携について

#### ア 調査結果概要

教職員アンケートの自由記述において「中高の連携」に関する改善点が多く挙げられた。改善点として「中学校の教員が高校のことを、高校の教員が中学校のことをもっと知ることのできる仕組みづくり」「教科における中高の連携の推進」「教職員全員の共通理解を図る」「中高一貫した進路指導」などが挙げられた。

#### イ アンケート自由記述・ヒアリング調査結果

アンケートの自由記述及びヒアリング調査では、「中学校の教員が高校のことを、高校の教員が中学校のことをもっと知ることのできる仕組みがあればよいと感じている。(教職員・高校)」「私たち教職員がお互いの教育についてしっかりと知っておかないといけないと強く感じる。(教職員・中学校)」「中学校と高校の教員が双方乗り入れる授業がもっとあるといいなと感じる。(教職員・高校)」「もっと連携が図れると、各教科に興味をもつ生徒が増えると考える。(教職員・高校)」という意見があった。

#### ウ 相互乗り入れ授業の成果と課題

中高の連携については、7月の調査以降追加のヒアリングを行った。教職員からは、「高校の教員が中学校の授業を担当することで、中学校教育全般（義務教育の段階であること、学習内容だけでなく生活指導や中学校の文化や価値観、高校とは違う発達段階における支援・指導、保護者との関係性（距離感））を直接実感できた。」「高校の学習につなげるために、中学校段階での指導や定着を、教員自身が直接実感できた。」という意見があった。また、高校1年生の英語の授業を担当した中学校の英語科の教員からは、「高校での授業指導を経験したことで、中学校3年生段階の到達点（ゴール）を明確に意識することができた」という意見も挙げられた。

一方、課題として、指導する科目数が増えることで教員の負担が増すことを懸念する意見もあった。例えば、持ち時間数が週20時間であっても、5単位×4クラスで1科目を指導するのと複数科目を指導するのでは教材研究や評価等のバランスが課題となる。

また、長く中学校・高校それぞれの校種を指導してきた教員にとって、免許を所持していても、校種を越えた授業をすることに対する心理的な負担が大きいことへの懸念も示された。例えば、中学校の教員が高校の授業を行う場合、大学受験指導レベルの授業をする必要があり、不安を持つ原因となることが考えられる。



### 3 考察

- ・附属中学校の適性検査における競争率は、安定して高倍率を保っており、「市立中高一貫教育校という新たな選択肢を市民に提供する」という設置の目的を達成している。一方、高校の入学選抜における競争率については、募集が定員に満たなかった平成27年度実施（平成28年度入学）の募集以降は1.08～1.79倍で推移しているものの、今後、公立中学校の卒業生数が減少していくことが想定されることから、学校運営の在り方の検討にあたっては、これらの状況も考慮していく必要がある。
- ・附属中学校の適性検査については、毎年、高い倍率であり、注目されていることも踏まえ、検査の結果や内容等を分析し、一層の改善・充実を図っていく必要がある。
- ・教職員のアンケート調査結果では、6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラムが編成されているか、6年間を見通した体系的な学習指導、キャリア教育、特別活動が実施されているかについて、「とてもそう思う」と答えた教職員はそれぞれ1割程度であり、中高ともに一定数の教職員が、中学校と高校の連携について改善が必要と感じている。教育目標、スクール・ミッションの達成に向けては、学習指導やキャリア教育、特別活動等、全ての教育活動において、中高一貫教育校としての6年間を通した教育課程を再編成する必要がある。
- ・生徒や保護者のアンケート調査では、先取り学習の要望についての自由記述が多くあり、個別最適な学びの充実の観点からも検討が必要である。同様に、英語教育についての意見も多くあり、中高の指導内容・方法についての連携強化等が必要である。
- ・相互乗り入れ授業の成果と課題についての教職員ヒアリングでは、中高が互いの教育活動の意義や内容を直接実感できる利点等を評価する意見がある一方で、相互乗り入れで担当科目が増える負担や校種を越えた授業で大学進学指導をすることの心理的な負担を懸念する意見もあった。

## 第4 検証のまとめ

### 1 論点1：教育目標及びスクール・ミッションの達成状況について

- 「学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成」及び「自ら考え、自ら行動する力の育成」
  - ・教育目標の「学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成」及び「自ら考え、自ら行動する力の育成」については、附属中学校の「総合的な学習の時間（EGG）」や高校の「総合的な探究の時間（TRY&ACT）」、各教科等における探究的な学び、学校行事や部活動など多様な教育活動等を通じて育成が図られている。また、上記の教育目標に対応するスクール・ミッションの「国際社会及び日本における課題の発見・解決に資する知識・技能の習得」と、それらの活用に関わる「思考力、判断力、表現力」等の育成についても同様に行われている。
  - ・こうした資質・能力の育成に向けた取組は、質の高い学びによる高い学力の習得につながり、学力・学習状況調査や英検の実施結果等に成果として現れている。
  - ・一方で、「6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラム」の軸となる附属中学校の「総合的な学習の時間（EGG）」と高校の「総合的な探究の時間（TRY&ACT）」については、中高の接続や一貫性についての課題が指摘されている。6年間を見通した探究活動ができるようにカリキュラムを見直し、中学校段階の「総合的な学習の時間（EGG）」から高校段階の「総合的な探究の時間（TRY&ACT）」の学びを一体化する必要がある。
  
- 「未来を切り拓く力の育成」・「グローバル人材の育成」
  - ・教育目標「未来を切り拓く力の育成」については、附属中学校設立時から目指してきた基礎基本に基づいた高い学力の習得及び生徒が希望する進路への実現について成果が見られる。
  - ・スクール・ミッション「国際社会で活躍できるグローバル人材の育成」については、4技能をバランスよく育成する英語教育に加え、「総合的な学習の時間（EGG）」や「総合的な探究の時間（TRY&ACT）」、横浜スーパーグローバルハイスクール（横浜SGH）、国際交流、海外研修等の取組を通して生徒の実践的な英語力の育成やグローバルな視点の定着が図られている。実践的な英語力の育成では、中高ともに、令和4年度に目標の英検の取得率を達成するなど、成果を上げている。
  - ・一方で、グローバルな視点の定着については、アンケート調査結果から、生徒のグローバルへの意識は高いが、それが必ずしも海外大学への進学・留学・仕事での国際的な活躍という将来の目標につながっておらず、学校が目標としている「南高校が目指すグローバルリーダー」の育成に向けて課題がある。

- ・生徒がグローバルへの意識を自身の将来の意向・目標につなげるためには、できるだけ早期から海外に対するイメージを具体化していくことが効果的と考えられることから、**国際交流等の海外プログラムの早期再開は必須である**。附属中学校の海外研修の行先であり、姉妹校も所在するカナダ・バンクーバー市は、多様性が特徴の一つであり、生徒が多く気づき・学びを得られることが期待できる都市である。海外との交流においては、相手と良好な関係を築くことがプログラムの効果的な実施につながることから、これまでの交流を軸として活動を充実させていくことが望ましい。また、国際都市横浜の強みを生かし、国内における**国際教育機関等と連携していくことも有効である**。
- ・生徒のニーズに合わせて海外での経験を積めるよう支援することも重要であることから、海外大学進学支援プログラムの拠点校として培ってきた経験や利点も生かし、**海外大学進学・留学等を促進する必要がある**。
- ・グローバルリーダーとしての資質・能力を育成する観点では、6年間を見通した体系的なキャリア教育の視点からのグローバル教育へのアプローチも必要である。また、実践的な英語力の更なる伸長のために、**英語の活用機会の充実が求められる**。

## 2 論点 2：併設型中高一貫教育校としての取組について

### ○ 教育課程・カリキュラム編成

- ・附属中学校の1期生が大学入試を受験した平成30年度以降、国公立大学合格者数、難関国公立大学合格者数、難関私立大学合格者数はいずれも増加しており、大学合格実績が大きく向上している。また、高入生の国公立大学合格者数も、卒業生数あたりの合格者数は附属中学校設立前より若干の増加傾向にあり、基礎学力をバランスよく身に付ける教育活動の成果が見られる。
- ・附属中学校1期生から3期生は、高校2年時まで中入生と高入生を別クラスで編成、高校3年時は混合クラスを編成し、先取り学習を実施していた。しかし、別クラスで学ぶことによる学習進度の調整や学年が一体となって活動する場面などで課題があったことから、附属中学校4期生からは、高校入学時から、中入生・高入生の混合クラスにすることとし、先取り学習は行わず、学習内容の深掘りを行うこととした。
- ・アンケート調査結果における、学校生活に関しての中入生と高入生の比較では、中入生・高入生ともにおおむね「楽しい」、「充実している」と答えている。入学当初から混合クラスとする変更を行ってからは、異なる環境で学んだ生徒同士が、切磋琢磨する環境の中で、お互いを認め尊重し合いながら高め合う環境となっており、生徒が充実して学校生活を送っている様子が伺える。
- ・授業の内容については中入生・高入生ともに面白いと感じている生徒が多いが、授業の難易度、進む速さ、学ぶ量に関する項目の比較では、内容が難しい、進度が速い、学ぶ量が多いという回答は高入生の方が多い。また、生徒や保護者のアンケート調査では、先取り学習の要望についての自由記述が多くあった。こうした状況は、計画的

な学習支援をきめ細かく実施しても生じていることから、改めて対策を検討する必要がある。

- ・教職員のアンケート調査結果では、6年間を見通した文理融合の横断的カリキュラムの編成、6年間を見通した体系的な学習指導、キャリア教育、特別活動の実施について、「とてもそう（編成・実施されている）思う」と答えた教職員は1割程度であり、中高ともに一定数の教職員が、中学校と高校の連携について改善が必要と感じている。教育目標及びスクール・ミッションの達成に向け、**中高一貫教育校としての6年間を見通した教育課程を再編成する必要がある。**
- ・教育課程の再編成にあたっては、個別最適な学びと協働的な学びの充実の観点も踏まえ、中高教職員が共に、育成する資質・能力を明確にして一つの教育課程を作り上げていくことが重要である。その際、中高一貫教育校における教育課程の特例を活用することも考えられる。

## ○ 学校運営

- ・附属中学校の適性検査における競争率は、安定して高倍率を保持しており、「市立中高一貫教育校という新たな選択肢を市民に提供する」という設置の目的を達成している。
- ・附属中学校教員と高校教員の相互乗り入れ授業については、高校では、例年一定数の教員が附属中学校の授業を担当しているが、附属中学校の教員が高校の授業を担当しているのは1教科であり、単位数も少ない。
- ・教職員からのヒアリングでは、中高が互いの教育活動の意義や内容を直接実感できる利点等を評価する意見がある一方で、相互乗り入れで担当科目が増える負担や校種を越えた授業で大学進学指導をすることの心理的な負担を懸念する意見もあった。相互乗り入れ授業については、中学校3年生と高校1年生の中高接続の学年から充実を図るなどの工夫が必要である。
- ・教育委員会は、令和4年度の人事異動から、中高一貫教育校内の人事交流の制度を定めたり、市立学校の教員へ広く中高一貫教育校の特色を周知したりするなど、人事交流の活性化に向けて取組を行っている。今後、これらの仕組みの活用によって、中高間の人事交流を促進し、高校と附属中学校の連携体制が強化されるよう、取り組んでいく必要がある。
- ・今後、教育目標、スクール・ミッションの達成に向けて、更に前進させるためには、6年間の一貫した教育課程の再編成、中高の連携強化、グローバル人材の育成に向けた取組の一層の充実が求められる。附属中学校・高校が一体となり、6年間一貫して生徒を育成していくために、高校からの入学者募集を停止するなど、中高一貫教育校の運営や取組について見直すことが必要である。
- ・今後、県内の公立中学校の卒業生数が減少していくことが想定されることから、学校運営の在り方の検討にあたっては、これらの状況も考慮していく必要がある。

# 参考資料

## 1 中高一貫教育校の概要

### (1) 導入の趣旨<sup>※12</sup>

従来の中学校・高等学校の制度に加えて、生徒や保護者が6年間の一貫した教育課程や学習環境の下で学ぶ機会を選択できるようにすることにより、中等教育の一層の多様化を推進し、生徒一人一人の個性をより重視した教育の実現を目指す。

### (2) 中高一貫教育校の実施形態<sup>※12</sup>

中高一貫教育校には、生徒や保護者のニーズ等に応じて、設置者が適切に対応できるよう、3つの実施形態がある。

#### ア 中等教育学校

一つの学校として、一体的に中高一貫教育を行う。

＜全国の学校数（令和5年度・国公立）＞

・39校

＜神奈川県内の中等教育学校＞

中等教育学校	設置年度
神奈川県立平塚中等教育学校	平成21年度
神奈川県立相模原中等教育学校	平成21年度

#### イ 併設型の中学校・高等学校

同一の設置者による中学校と高等学校を接続する。併設型中学校の生徒は、入学者の選抜を行わずに高等学校へ進学する。

＜全国の学校数（令和5年度・国公立）＞

・106校

＜神奈川県内の併設型中高一貫教育校＞

高等学校	附属中学校	設置年度
横浜市立南高等学校	横浜市立南高等学校附属中学校	平成24年度
横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校	平成29年度
川崎市立川崎高等学校	川崎高等学校附属中学校	平成26年度

※12 導入の趣旨、中高一貫教育校の実施形態は下記の情報をもとに作成。

文部科学省ホームページ ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/ikkan/2/1316125.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/ikkan/2/1316125.htm))

神奈川県ホームページ (<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/dc4/chuukou/index.html#renkei>)

川崎市ホームページ (<https://www.city.kawasaki.jp/880/page/0000022178.html>)

### ウ 連携型の中学校・高等学校

市町村立中学校と都道府県立高等学校など、異なる設置者間でも実施可能な形態であり、中学校と高等学校が、教育課程の編成や教員・生徒間交流等の連携を深めるかたちで中高一貫教育を実施する。

＜全国の学校数（令和5年度・国公立）＞※13

・79校

＜神奈川県内の連携型中高一貫教育校＞

高等学校	中学校	連携開始年度
神奈川県立愛川高等学校	愛川町立愛川中学校 愛川町立愛川東中学校 愛川町立愛川中原中学校	平成21年度
神奈川県立光陵高等学校	横浜国立大学教育人間科学部 附属横浜中学校	平成21年度

### (3) 中高一貫教育校における教育課程の基準の特例※14

#### ア 中学校段階【中等教育学校】【併設型】【連携型】

##### ○ 選択教科による必修教科の代替

- ・ 必修教科の授業時数を、年間70単位時間の範囲内で減じ、当該必修教科の内容を代替することができる内容の選択教科の授業時数に充てることができる。

#### イ 中学校段階・高等学校段階【中等教育学校】【併設型】

##### ○ 指導内容の移行

- ・ 前期課程（中学校）と後期課程（高等学校）の指導内容の一部を相互に入れ替えが可能。
- ・ 前期課程（中学校）の指導内容の一部を後期課程（高等学校）へ移行することが可能。
- ・ 後期課程（高等学校）の指導内容の一部を前期課程（中学校）へ移行することが可能。この場合、後期課程（高等学校）で再履修しないことが可能。
- ・ 中学校段階内における指導内容の一部を移行することが可能。

#### ウ 高等学校段階【中等教育学校】【併設型】【連携型】

##### ○ 普通科における「学校設定科目」・「学校設定教科」

- ・ 36単位まで、卒業に必要な修得単位数に含めることができる。

※13 全国の学校数

文部科学省「令和5年度学校基本調査」(<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tstat=000001011528>)を参照。

※14 中高一貫教育校における教育課程の基準の特例は、文部科学省ホームページ掲載資料から作成。  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/045/siryo/1318730.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/045/siryo/1318730.htm))



## 2 教育課程表

### 南高等学校附属中学校・南高等学校 教育課程表

(令和5年度入学者の中学1年から  
高校3年までのもの)

●さらに充実した教育課程にするために、変更の可能性もあります。

中学校の表内の○数字は時間数を表す。

時間数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
中学1年	国語⑤					社会③			数学⑤					理科③			音楽・美術③			保健体育③			技術・家庭②		英語⑤			道徳①	学活①	総合②			
中学2年	国語⑤					社会③			数学⑤					理科④			音楽①	美術①	保健体育③			技術・家庭②		英語⑤			道徳①	学活①	総合②				
中学3年	国語⑤					社会④				数学⑤					理科④			音楽①	美術①	保健体育③			技術・家庭①	英語⑤			道徳①	学活①	総合②				
高校1年	国語		地理歴史		公民		数学			理科			保健体育		芸術 (1科目選択)		英語		情報		総合的な探究の時間 LHR												
	現代の国語	言語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学A	物理基礎	生物基礎	体育	保健	音楽Ⅰ	書道Ⅰ	美術Ⅰ	英語	コミュニケーションⅠ	論理・表現Ⅰ	情報Ⅰ																
高校2年	論理国語		古典探究		地理総合		数学Ⅱ		数学B		(1科目選択) 化学基礎	地学基礎	体育	保健	英語 コミュニケーションⅡ		論理・表現Ⅱ		家庭	必修選択(5単位) (1科目選択)		総合的な探究の時間 LHR											
	生物	物理	世界史探究	日本史探究	政治経済	地学	化学	家庭基礎	情報Ⅱ	芸術発展																							
高校3年	論理国語		体育		英語 コミュニケーションⅢ		論理・表現Ⅲ		必修選択(8単位)				自由選択科目(12単位)								総合的な探究の時間 LHR												
	(1科目選択)		(1科目選択)		文学国語発展		数学Ⅲ		数学総合		化学		物理発展		生物発展		世界史発展		日本史発展				生徒の進路希望に応じて (2単位・4単位)科目を複数設置										

### 3 総合的な学習・探究の時間（EGG・TRY&ACT）

## "EGG"から『TRY&ACT』へ

**EGG** とは総合的な学習の時間の通称です。

生徒たちの中学校生活を卵が孵化するまでの過程に見立て、附属中での3年間で蓄えた力を、高校で各自の目標に向けて発揮し、6年後には大空へ羽ばたいてほしいという願いを込めて名づけました。

総合的な学習の時間に取り組む活動の特色を表す3つのキーワード

**Explore さがす** (学びの探究、課題さがし)  
**Grasp つかむ** (自己の可能性の発見、他者との学びによる確かな理解)  
**Grow のびる** (最終的な人間性の成長)

の頭文字をとり、総合的な学習の時間を"EGG"という愛称で呼んでいます。



中学「EGG」での経験や知見を活かし、高校の総合的な探究の時間「TRY&ACT」で実践します。

#### 【EGG体験】

- プロジェクトあしがらアドベンチャー21(中学1年)
- グループエンカウンター研修(中学1年)
- コミュニケーション研修(中学1年)
- 英語集中研修(中学1年～3年)
- 国際交流活動(中学1年～3年)
- 御殿場イングリッシュキャンプ(中学2年)
- カナダ研修旅行(中学3年)

#### 【EGG講座】

- 必修講座 ●K-DEC開発教育講座 ●JAXA宇宙開発講座 ●弁護士による法教育講座 など  
 選択講座 ●JICA横浜国際協力講座 ●米国大学機構海外留学講座 ●東大海洋アライアンス講座  
 ●TBS出張スタジオ ●企業訪問など

#### 【EGGゼミ】

- 基礎力養成演習(中学1年)
- グループ研究(中学2年)
- 卒業研究…論文作成、発表(中学3年)

#### 卒業研究 おおまかな流れ

- |                 |                                  |
|-----------------|----------------------------------|
| 研究テーマの設定(4月～6月) | ●テーマ領域「国際」「健康福祉」「環境」「テクノロジー」「人間」 |
| 情報の収集(7月～10月)   | ●中学職員アドバイザー面接 ●研究計画書作成           |
| 整理・分析(11月・12月)  | ●調査研究活動交流 ●中間発表会                 |
| まとめ・表現(1月～3月)   | ●高校職員アドバイザー面接 ●調査研究活動交流          |
|                 | ●卒業論文執筆 ●卒業研究発表会(中学2年生聴講)        |

※新型コロナウイルス感染症の影響により、実施ができないプログラムも掲載しています。

南高校の総合的な探究の時間

**『TRY&ACT』** 3・4ページ参照

次世代のグローバルリーダー



文部科学省指定スーパーグローバルハイスクールネットワーク参加校として、

横浜版スーパーグローバルハイスクール(YSGH)として  
“次世代のグローバルリーダー”を育成



グローバルビレッジ研修

研修旅行(シンガポール)

## 総合的な探究の時間

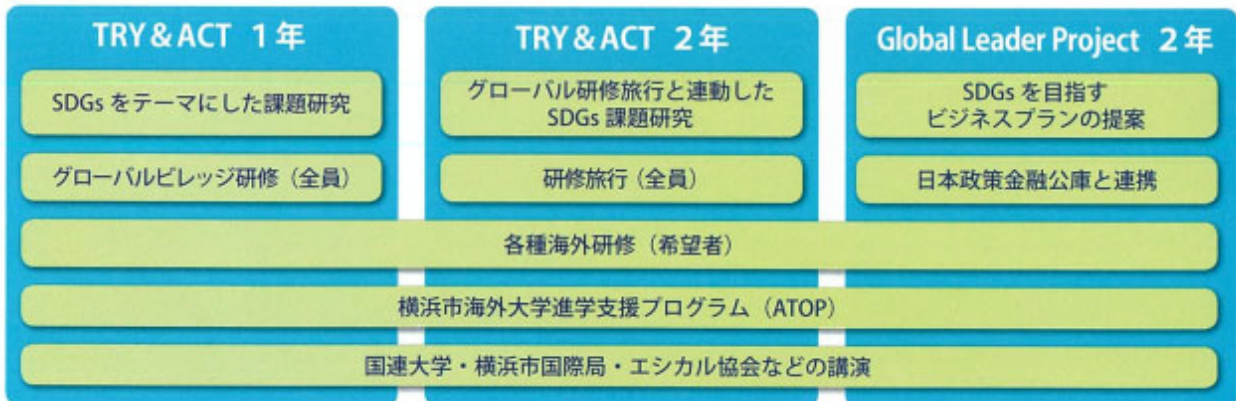
# 『TRY&ACT』

### で育む

#### グローバルリーダー としての必要な素養と異文化理解

国立教育政策研究所・令和4年度教育課程実践検証協力校「総合的な探究の時間」

### グローバル人材の育成 × SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



課題設定力 ・ 情報収集力 ・ 分析力 ・ 表現力

#### 南高が目指すグローバルリーダー

横浜から日本を牽引しようとする高い志を持つ生徒

国際社会の発展に寄与できるリーダーとなる生徒

グローバル社会での将来像を描く生徒

主体的に学び、自ら探究する生徒

# 検証会議

## 南高等学校及び南高等学校附属中学校における中高一貫教育に関する検証会議 運営要綱

制定 令和5年6月20日 教高第303号（教育長決裁）

### （趣旨）

第1条 この要綱は、南高等学校及び南高等学校附属中学校（以下「南高等学校・附属中学校」という。）における中高一貫教育に関する検証会議（以下「検証会議」という。）の運営に関し必要な基本事項を定める。

### （目的）

第2条 高校教育課長は、南高等学校・附属中学校における中高一貫教育の検証にあたり、次に掲げる事項について検証会議の委員に意見及び助言を求める。

- (1) これまでの取組の成果及び課題に関すること
- (2) 今後の取組、方向性等の検討に関すること
- (3) その他中高一貫教育の推進にあたって検討を要すること

### （委員）

第3条 検証会議の委員は、次のとおりとする。

- (1) 学識経験者
- (2) その他教育長が必要と認める者

### （会議の招集）

第4条 検証会議は、高校教育課長が招集する。

2 前項の会議は、令和5年6月20日から令和6年3月31日までの期間において必要により開催することとする。なお、期間については、検証会議の状況等により必要に応じて延長できることとする。

### （会議の運営及び庶務）

第5条 会議の運営及び庶務は、教育委員会事務局高校教育課が行う。

### （その他）

第6条 この要綱のほか、その他会議の運営に関して必要な事項については、高校教育課長が定める。

## 附 則

### （施行期日）

この要綱は、令和5年6月20日から施行する。

○ 検証会議 委員名簿（五十音順、敬称略）

氏名	職名等
植田 みどり	国立教育政策研究所総括研究官
坂野 慎二	玉川大学教育学部教授
高木 展郎	横浜国立大学名誉教授
ブルース・L・バートン	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター所長
守屋 一幸	元鎌倉女子大学教育学部准教授

○ 検証会議スケジュール

年月	予定	内容
令和5年6月	第1回 検証会議	論点の整理、現状の把握、調査計画
7月	第2回 検証会議	現地調査、ヒアリング
10月	第3回 検証会議	アンケート結果（速報値）の報告 方向性の整理
12月	第4回 検証会議	報告書案
令和6年3月	第5回 検証会議	報告書案

## 教育委員会事務局担当者

○ 教育委員会事務局担当者

氏名	職名等
石川 隆一	教育委員会事務局学校教育企画部長
宮村 浩文	教育委員会事務局高校教育課長
小出 文則	教育委員会事務局高校教育課首席指導主事
佐藤 理史	教育委員会事務局高校教育課担当係長
漆畑 優紀	教育委員会事務局高校教育課担当係長
山本 俊太郎	教育委員会事務局高校教育課主任指導主事
駒木 健志	教育委員会事務局高校教育課指導主事



南高等学校及び南高等学校附属中学校における  
中高一貫教育に関する検証  
報告書

令和6年3月

横浜市教育委員会事務局高校教育課

〒231-0005 横浜市中区本町6-50-10

電話 045(671)3272

F A X 045(640)1866